

現代文問題集⑧

【高校中級・第三】

目次

【第一問】	待つとは何か … 2ページ
【第二問】	似ているということ … 13ページ
【第三問】	箱の底 … 23ページ
【第四問】	上達とは何か … 35ページ
【第五問】	街の保存と更新 … 46ページ
【第六問】	約束の場所 … 58ページ
【第七問】	うまい説明と正しい説明 … 69ページ
【第八問】	残るものと消えるもの … 80ページ
おわりに	… 94ページ

【第一問】 待つとは何か

私たちはふつう、「待つ」という行為を、何もしないことに近いものとして考えやすい。列車を待つ、返事を待つ、順番を待つ。ここでは、何かが到来するまでのあいだ、自分はただ時間の中に置かれているように見える。実際、待つことは多くの場合、自由な行動を制限する。先の予定は定まらず、動き出すためのきっかけは自分の外側にある。だから待つことは、しばしば受け身で、不自由で、どこか空白に近いものとして感じられる。

しかし、待つことを単なる停止と見なすのは、おそらく半分しか当たっていない。待つという状態の中で、私たちはただ時間を失っているのではない。何を待っているのか、どこまで待つのか、待ちながら何を保とうとするのかによって、その時間の質は大きく変わる。たとえば、相手の返答を待つとき、私たちは単に時計の針を眺めているのではない。届くかもしれない言葉に備え、その内容を想像し、時には返ってこない可能性まで引き受けながら、その場にとどまっている。そこには、停止というよりも、ある種の張りつめた持続がある。

待つことの難しさは、時間の長さそのものより、むしろ時間の中身の定まらなさにある。何時まで待てばよいのかが分からないとき、人は時間の使い方を失いやすい。十分待つべきなのか、もう見切りをつけるべきなのか、その判断もまた「待つ」ことの中に含まれてしまう。つまり待つとは、単に結果を受け取るまでの受動的な期間ではなく、待ち続けるか、やめるか、その境目を引き受ける行為でもある。

ここで興味深いのは、待つことにはつねに相手や対象への見積もりが含まれるという点である。人は、自分にとってどうでもよいものを長くは待たない。逆に言えば、待つという行為は、それだけで相手や対象に一定の重みを与えている。店の開店を待つことと、誰かの回復を待つこととは、同じ「待つ」でも、その内側にある時間の密度はまるで違う。待つという一語の中には、期待、信頼、不安、諦めきれなさ、あるいは礼儀のようなもので、さまざまな感情の層が折り重なっている。

だから待つことは、ただ受け身なのではない。むしろ、何かをこちらの都合で引き寄せないという点で、かなり能動的な態度でもある。たとえば、相手が言いよんでいるとき、すぐに先回りして言葉を補うこともできるだろう。しかし、あえて補わずに待つとき、私たちは相手が自分の速度で言葉にたどり着く可能性を残している。そこでは「何もしない」のではなく、「こちらから決めてしまわない」ことが行われている。待つとは、しばしば介入しうる力を持ちながら、その力の行使をいったん控えることもある。

もっとも、このように言うと、待つことを過度に美化してしまう危険がある。実際には、待つことが単なる先延ばしや回避になっている場合も少なくない。決めるべきことを決めず、「もう少し様子を見る」と言い続けることで、責任を先へ送っているだけのこともある。待つことが意味を持つのは、待っているあいだに何を見ようとしているのか、何を急いで決めないでいようとしているのが、自分の中である程度保たれているときである。待つことは、それ自体で価値を持つのではなく、何を守るための待ちなのかによって、初めて輪郭を得る。

この点で、待つことは判断と深く結びついている。多くの人は、判断することと待つことを反対のもののように考える。だが実際には、よい判断のためには待つことが必要な場合がある。情報が不足しているとき、感情が強く動いているとき、こちらの理解がまだ一面的であるとき、すぐに結論へ飛びつくことは、しばしば「決めた」という満足だけをもたらして、判断そのものを浅くする。待つことによって、見えていなかった条件や、自分の中の焦りそのものが見えてくることがある。

とはいえ、待てば必ずよい判断に至るわけでもない。時間は、ときにものごとを熟させるが、ときにただ過ぎ去る。待つことが意味を持つためには、待つあいだに世界との接点が保たれていなければならない。たとえば、相手からの返事を待ちながら、ただ不安を反復するだけなら、その待ちは自分を閉じたものにしやすい。だが、待ちながら相手の置かれた事情を考えたり、自分がなぜこれほど結果を急ぐのかを見つめたりするなら、その待ちは単なる空白ではなく、理解を深める時間にも

なりうる。

待つことには、時間の扱い方だけでなく、自分の位置をどう保つかという問題も含まれる。すぐに答えを出したい、結果を知りたい、関係をはっきりさせたいという欲求は、誰の中にもある。待つことは、その欲求が存在することを認めつつ、それにすぐ従わない態度である。言い換えれば、待つとは、自分の中の焦りを消すことではなく、その焦りを抱えたまま、なお相手や状況に先んじて結論を奪わないことなのだ。

このように考えると、待つことは単なる受動でも、単なる能動でもない。むしろ、行動と非行動の境界にある独特の営みだと言える。自分から押し進めることもできるし、完全に手を離すこともできる、そのあいだにとどまる。そこでは、何かをする力よりも、何かをしないでいられる力のほうが試されているのかもしれない。

待つとは、到来を信じることは必ずしもない。

むしろ、到来しないかもしれないもののために、なお場所をあけておくことに近い。

そしてその「あけておく」という態度の中に、

人が他者や世界に対して持ちうる、ひとつの静かな能動性がある。

設問

問一

本文の主張を最も精確に再構成しているものを一つ選べ。

ア 待つことは多くの場合不自由を伴うが、本質的には何もしない受動的状态であり、判断とは切り離して考えるべきである。

イ 待つことは受け身に見えやすいが、何を待ち、どこまで待ち、何を急いで決めないでいようとするかによって、能動的な態度にもなりうる。

ウ 待つことは、相手や対象に重みを与える行為である以上、つねに信頼や希望に支えられた前向きな営みである。

エ 待つことの価値は、時間がものごとを成熟させる点にあり、十分に待ちさえすれば判断は自然に深まる。

問二

本文の立場からみて、最も適切でないものを一つ選べ。

ア 待つことには、相手や対象が自分にとってどの程度重いかという見積もりが含まれている。

イ 待つことは、こちらから決めてしまえる場面で、あえて先回りしないこととして能動的な意味を持つ場合がある。

ウ 待つことが意味を持つかどうかは、待っているあいだに何を守ろうとしているかと無関係である。

エ 待つことは、焦りをなくすことではなく、焦りを抱えたまま結論を急がない態度でもある。

問三

本文の論理展開を最も適切に示すものを一つ選べ。

ア 待つことの受動性 ↓ 待つことの能動性 ↓ 待つことの濫用可能性 ↓ 判断との関係 ↓ 結論

イ 待つことの礼賛 ↓ 先延ばしの否定 ↓ 判断停止の勧告 ↓ 希望の回復

ウ 待つことの歴史的变化 ↓ 現代人の性格批判 ↓ 能動性の再定義 ↓ 結論の保留

エ 待つことの定義 ↓ 他者理解の否定 ↓ 非行動の擁護 ↓ 到来への信仰

問四

本文における「待つこと」と「判断」の関係について、最も適切なものを一つ選べ。

ア 待つことは判断を遅らせるだけであり、両者は基本的に対立する。

イ 待つことは、情報不足や感情の強さによって浅くなりがちな判断を、いったん支える働きを持ちうる。

ウ 待つことは判断に有効であるが、それは時間が経てば自動的に理解が深まるからである。

エ 待つことと判断とは無関係であり、前者は感情、後者は理性の問題として区別される。

【記述問題】

問五

本文において、待つことが「単なる停止」ではないとされるのはなぜか。説明せよ。(150字前後)

問六

本文の立場に立ち、「待つこと」が受動とも能動とも言い切れないのはなぜか、説明せよ。(170字前後)

【核心をことばにする練習】

次の一節を読んで、①～④に答えなさい。

対象文

待つとは、自分の中の焦りを消すことではなく、その焦りを抱えたまま、なお相手や状況に先んじて結論を奪わないことなのだ。

① 事実

本文では何が述べられているか。

② ここから言えそうなこと

③ 言いすぎになりそうなこと

④ つまりどういうことだと言えるか

解答・解説

【全体総括】

本章は、「待つ」という一見受動的に見える行為を取り上げ、その内側にある能動性や判断との関わりを論じた評論である。筆者はまず、待つことが不自由や停止に近いものとして感じられやすいことを確認する。だがそのうえで、何を待つのか、どこまで待つのか、何を急いで決めないでいようとするのかによって、待つことは単なる空白ではなく、張りつめた持続であり、ある種の能動的態度にもなりうることを述べる。

さらに本文は、待つことを安易に美化しない。待つことは、意味ある保留にもなりうるが、先延ばしや回避にもなりうる。したがって大切なのは、待つこととそれ自体を称揚することではなく、何を守るための待ちなのか、何を急いで決めないでいようとしているのが保たれているかどうかである。後半では、待つことが判断と結びつくこと、すぐに決めることが必ずしもよい判断を保証しないこと、しかし待てば自動的に理解が深まるわけでもないことが示され、最後に、待つことは受動とも能動とも言い切れない独特の営みとして捉え直される。

読解の核心は、

- ・ 「待つⅡ何もしない」という通念がどのように修正されるか
- ・ 待つことの能動性がどこにあるか
- ・ 待つことの意味が「何を守るための待ちか」にかかっていること
- ・ 待つことと判断が対立ではなく結びつきうることを見抜けるかどうかにある。

問一

正答…イ

アは誤り。本文は、待つことを単なる受動的停止とみなす立場を修正している。ウも不適切。「つねに信頼や希望に支えられた前向きな営み」とまでは言っていない。

本文は、不安や諦めきれなさも待つことに含まれるとしている。

エも誤り。本文は、待てば自然によい判断に至るとは述べていない。

したがって、待つことが受け身に見えながらも、何を待ち何を急いで決めないかによって能動的態度にもなるとするイが最も適切である。

問二

正答…ウ

アは本文の「待つという行為は、それだけで相手や対象に一定の重みを与えている」に対応する。

イも、先回りせずに相手が自分の速度で言葉にたどり着く可能性を残す、という本文の議論そのもの。

エも本文後半に一致する。

ウだけが不適切で、本文はむしろ、待つことが意味を持つかどうかは、何を守るための待ちなのかによると明言している。

問三

正答…ア

本文は、

1. 待つことの受動性・不自由さ
2. その修正としての能動性
3. 待つことの美化への警戒と濫用可能性
4. 判断との結びつき
5. 結論としての独特の営み

という流れで進む。

したがってアが最も適切である。

イ・ウ・エはいずれも、本文にない礼賛、歴史論、信仰などを含んでおり不適切。

問四

正答…イ

アは誤りで、本文は待つことと判断を対立ではなく結びつけている。

ウも不適切。時間が自動的に理解を深めるとは述べていない。

エも誤りで、待つことと判断は無関係ではない。

したがって、待つことが、情報不足や感情の強さによって浅くなりがちな判断を一度支える働きを持ちうるとするイが最も適切である。

問五

本文において、待つことが「単なる停止」ではないとされるのはなぜか。説明せよ。

模範解答

待つことは、ただ時間が過ぎるのを受け身で受けるのではなく、何を待ち、どこまで待ち、何を急いで決めないでいようとするかを含むからである。相手の返答に備えたり、返ってこない可能性も引き受けながらその場にとどまったりする点で、待つことの内部には張りつめた持続や判断があり、単なる空白とはいえないのである。

別解例①

本文が待つことを単なる停止としないのは、待っているあいだにも、相手への見積もりや、自分がどこで見切るかという判断が働いているからである。待つとは何も起こらない時間ではなく、届くかもしれないものに備え、なお自分から先に決めてしまわずにとどまる時間であり、その意味で中身を持った持続なのである。

別解例②

待つことは、一見すると動きのない状態に見えるが、本文では、相手や対象の重みを引き受けつつ、その到来の有無が定まらぬまま場所をあけておく営みとして描かれる。そこでは、どこまで待つか、何を急いで決めないかという選びが含まれているため、待つことは単なる空白や停止ではなく、判断を伴った行為だといえる。

■自己採点チェック

- ・ 「何を待つか／どこまで待つか／何を決めないか」のどれかに触れているか
- ・ 待つ時間の中に判断や備えがあると書けているか
- ・ 単なる「受け身ではない」で終わっていないか

問六

本文の立場に立ち、「待つこと」が受動とも能動とも言い切れないのはなぜか、説明せよ。

模範解答

待つことは、結果の到来が自分の外側にあるという点では受動的であり、不自由や停止に近く見える。だが同時に、相手や状況に先んじて結論を奪わず、介入しうる力をあえて控え、何を守るために待つのかを引き受ける点では能動的でもある。したがって待つことは、行動と非行動の境界に位置し、どちらか一方だけでは捉えきれない営みなのである。

別解例①

本文では、待つことは自分の都合だけで進められず、対象の到来を受けるしかないという意味で受動的である。しかしその一方で、こちらから補ったり決めたりできる場面で、あえてそうせずに場所をあけておくこともあるため、能動的な選択も含んでいる。外から見れば停止に見えながら、内側では控える意志が働くため、単純にどちらとも言えないのである。

別解例②

待つことが受動とも能動とも言い切れないのは、時間の流れ自体は自分で支配できず、結果も外側から来るという点で受け身だからである。だが、本文は同時に、待つことを、焦りを抱えながらも自分から結論を取りに行かない態度として捉える。つまり待つことは、何もしないのではなく、しうることをあえてしない力でもあり、その二面性が両義的な性格を作っている。

■自己採点チェック

- ・ 受動的な面と能動的な面の両方を書けているか
- ・ 受動Ⅱ外側に結果がある、能動Ⅱ控える選択、のどちらかに触れているか
- ・ 「どちらとも言えない」を、ただ曖昧とするのでなく理由づけできているか

【核心をことばにする練習 記入例】

対象文

待つとは、自分の中の焦りを消すことではなく、その焦りを抱えたまま、なお相手や状況に先んじて結論を奪わないことなのだ。

① 事実

待つことは、焦りをなくすことではない。

焦りがあっても、それを抱えたまま、相手や状況より先に結論を出さないことだと述べている。

② ここから言えそうなこと

待つとは、落ち着いて何も感じなくなるのではなく、急ぎたさを持ちながらも、すぐに決めてしまわない態度だと言える。

③ 言いすぎになりそうなこと

- ・ 待つことができる人には、焦りや不安がまったくない。
- ・ 待つとは、何も決めずにずっと保留し続けることである。
- ・ 待つことのできる人は、相手より道徳的に優れている。
- ・ 待つとは、相手に判断をすべて委ね、自分は責任を負わないことである。
- ・ 待つことができれば、必ず相手との関係はうまくいく。

④ つまりどういうことだと言えるか

待つとは、急いで答えを出したい気持ちを抱えながらも、その気持ちだけで相手や状況を決めつけないことだと言える。

【第二問】 似ているということ

私たちは、ものごとを理解するとき、しばしば「同じもの」と「違うもの」を区別しようとする。名前をつけ、種類を分け、境界を引くことで、世界は扱いやすくなる。生物を分類し、雲の形を見分け、岩石の種類を区別し、文法の規則を整理する。こうした営みがなければ、私たちは目の前の現象にその都度圧倒され、何が繰り返し現れているのか、どこに共通性があるのかをつかみにくいだろう。分類は、世界の複雑さを秩序だったものとして受け取るための強力な技術である。

しかし、分類することと、何かを「似ている」と見ることは、必ずしも同じではない。分類は、多くの場合、あらかじめ定められた基準に従って対象を群に分ける。これに対し、「似ている」という感覚は、しばしばもっと曖昧で、しかも多方向的である。たとえば、ある鳥と別の鳥が似ていると言うとき、羽の色が似ているのか、鳴き方が似ているのか、飛び方が似ているのかは一樣ではない。人は「似ている」と感じながら、その似ている点をまだ言葉にできていないことすらある。

ここで注意すべきなのは、「似ている」という見方が、分類よりも曖昧であるからといって、価値が低いわけではないということである。むしろ、新しい発見は、しばしばこの曖昧な「似ている」から始まる。何かがどこか似ている、以前見たものと重なる気がする、その感覚が、まだ名前のない関係を先に捉える。分類が既知の秩序を整える働きを持つのに対し、「似ている」という感覚は、ときに秩序そのものを作り替える入口になる。

たとえば、生物学においても、分類は固定された箱のように始まったわけではない。ある種と別の種のあいだにどのような共通性があるか、どの特徴を重く見るかによって、分類の仕方は変わってきた。形態の似かたを中心に見るのか、遺伝的な近さを中心に見るのか、あるいは生態的な役割に注目するのかによって、「同じ仲間」とされる範囲は揺れうる。つまり、分類とは単に自然に刻まれた線をなぞることではなく、何をもって「似ている」とみなすかの判断を含んでいる。

だが同時に、「似ている」と感じることは危うくもある。人はときに、表面上の印

象だけで深い共通性があると思ひ込みやすい。色や形が似ているから同じ種類だと考えたり、ふるまいが似ているから同じ性質を持つと見なしたりする。そこでは、「似ている」という感覚が、まだ十分に吟味されないまま、分類の根拠へと昇格してしまう。似ていることは、同一であることではないし、似ている点があることは、他の重要な違いがないことを意味しない。

この点で、分類と思考の関係は二重である。分類は思考を助けるが、その分類を支える「似ている」という感覚が粗いままでは、助けられるはずの思考そのものが誤った方向へ導かれる。逆に、似ているという感覚を慎重に育てるなら、分類はより豊かなものになる。つまり問題は、「分類するか、しないか」ではなく、何をどう似ていると見るか、その見方をどれだけ吟味できるかにある。

私たちは、似ているものを見つけると安心しやすい。未知のものも、すでに知っている何かに似ていると分かれば、急に扱える気がするからである。だが、その安心はしばしば、理解の始まりであると同時に、理解を止める場所にもなる。「ああ、あれと同じようなものだ」と思った瞬間、私たちは似ていない部分を見る努力をやめやすい。未知のものを既知へ接続することは必要だが、その接続をもって理解が完了したと考えるとき、似ているという感覚は、新しいものを古い箱へ押し込める働きに変わる。

そのため、ものごとをよく見るとは、単に違いを見つけることでも、単に共通点を見つけることでもない。むしろ、似ていると感じたときに、その「似ている」がどの次元のことなのかを問えること、また、違っていると感じたときに、その違いが本質的なものなのか偶然のものなのかを考えられることが大切になる。似ているという感覚は、思考の敵ではない。だが、それは常に、問い直されうる仮の足場である。

分類は、世界に秩序を与える。「似ている」という感覚は、その秩序を見つめる手がかりになる。だが、秩序も手がかりも、使い方を誤れば、世界を見やすくする代わりに、見えなくする。

設問

問一

本文の主張を最も精確に再構成しているものを一つ選べ。

ア 分類は対象を基準に従って整理するが、「似ている」という感覚は曖昧で主観的であるため、学問的理解にはできるだけ用いないほうがよい。

イ 分類は世界を秩序立てて理解するために有効だが、その前提には何を似ているとみなすかという判断があり、その判断が粗ければ理解もまた粗くなる。

ウ 「似ている」という感覚は新しい発見の出発点になりうるが、分類そのものは自然に刻まれた線をなぞる作業であるため、両者は本質的に別の営みである。

エ 未知のものを既知のものに似ていると捉えることは、理解を進める最も確実な方法であり、そこでは似ていない部分はいったん無視してよい。

問二

本文の立場からみて、最も適切でないものを一つ選べ。

ア 分類と思考の関係は一方向ではなく、分類を支える似ているという見方の質によって、思考の方向も左右されうる。

イ 「似ている」という感覚は、まだ名前のない関係を先に捉えることがあるため、新しい秩序の入口にもなりうる。

ウ ある対象同士に共通点が見られるなら、その共通点は他の違いよりも原則として重要だとみなしてよい。

エ 似ていると感じることは理解の出発点になりうるが、そこで思考を止めると未知のものを既知の箱に押し込めることにもなる。

問三

本文の論理展開を最も適切に示すものを一つ選べ。

ア 分類の必要性 ↓ 類似感覚との区別 ↓ 類似感覚の積極面 ↓ 類似感覚の危うさ ↓ 両者の関係の再整理
イ 分類の歴史 ↓ 類似感覚の否定 ↓ 新分類法の提案 ↓ 感覚的理解の放棄
ウ 類似感覚の危険性 ↓ 分類の絶対性 ↓ 未知の排除 ↓ 結論の保留
エ 分類の不可能性 ↓ 類似感覚の万能性 ↓ 共通点重視の擁護 ↓ 違いの相対化

問四

本文において、「似ている」という感覚が分類よりも価値が低いとはされないのはなぜか。説明せよ。(160字前後)

問五

本文の立場に立ち、分類が思考を助けながらも、同時に思考を誤らせうるのはなぜか。説明せよ。(180字前後)

【核心をことばにする】

次の一節を読み、①～④に答えなさい。

対象文

未知のものを既知へ接続することは必要だが、その接続をもって理解が完了したと考えるとき、似ているという感覚は、新しいものを古い箱へ押し込める働きに変わる。

① 事実

本文では何が述べられているか。

② ここから言えそうなこと

③ 言いすぎになりそうなこと

④ つまりどういうことだと言えるか

解答・解説

【全体総括】

本章は、世界を理解する際に行われる「分類」と、「何かを似ていると見る」感覚との関係を論じた評論である。筆者はまず、分類が世界の複雑さを整理し、秩序だったものとして受け取るための有力な技術であることを確認する。そのうえで、分類することと「似ている」と感じることは同じではなく、後者はしばしばより曖昧で、言葉に先立つ感覚として現れると述べる。

しかし本文は、「似ている」という感覚を曖昧だからといって低く見ていない。むしろ、新しい発見は、このまだ十分に言語化されていない類似の感覚から始まることがあるという。一方で、似ていると感じることは、表面上の印象から深い共通性を早のみこみしやすい危うさも持つ。したがって重要なのは、分類そのものを否定することでも、類似感覚に全面的に頼ることでもなく、何をどう似ているとみなしているのかを吟味し続けることだと結ばれる。

読解の核心は、

- ・ 分類と「似ている」という感覚の違い
- ・ 「似ている」が発見の入口にも、誤認の入口にもなりうること
- ・ 分類が自然の線をそのままなぞるものではないこと
- ・ 理解のための接続が、理解の停止へ変わる危険があることを捉えられるかどうかにある。

問一

正答…イ

アは誤りで、本文は「似ている」という感覚を曖昧だからといって排除すべきだとはしていない。

ウも不適切で、分類そのものが自然に刻まれた線をなぞる作業だとは本文は考えていない。むしろ分類には、何を似ているとみなすかという判断が含まれる。

エも誤りで、未知のものを既知へ接続することは必要だが、似ていない部分をいったん無視してよいとはしていない。

したがって、分類の有効性を認めつつ、その前提にある「似ている」の判断の質が理解の質を左右するとするイが最も適切である。

問二

正答…ウ

アは本文の「分類と思考の関係は二重である」に対応している。

イも、「似ている」という感覚が新しい発見の入口になりうるという本文の趣旨に合う。

エも、未知のものを既知へ接続した瞬間に理解を止めやすいという終盤の議論をよく捉えている。

ウだけが不適切で、本文は共通点を見つけることを重視する一方で、それが他の違いより原則として重要だとはしていない。むしろ、似ている点があることは、重要な違いがないことを意味しないと注意している。

問三

正答…ア

本文は、

1. 分類の有効性
2. 分類と類似感覚の区別
3. 類似感覚の積極的意義
4. その危うさ
5. 両者の関係の再整理

という流れで進む。したがってアが最も適切である。

イ・ウ・エはいずれも、本文にない否定や万能視を含んでいる。

問四

本文において、「似ている」という感覚が分類よりも価値が低いとはされないのはなぜか。説明せよ。

模範解答

「似ている」という感覚は曖昧で言葉に先立つが、まだ名前のない関係を先に捉え、新しい発見の出発点になりうるからである。分類が既知の秩序を整える働きを持つのに対し、類似の感覚は、その秩序自体を作り替える入口にもなる。したがって本文は、その曖昧さを欠点として退けるのではなく、慎重に吟味すべき手がかりとして位置づけている。

別解例①

本文が「似ている」という感覚を低く見ないのは、それが単なる曖昧さではなく、既存の分類では捉えきれない共通性を先に感じ取る契機にもなるからである。つまり、分類が整理の技術であるのに対し、類似感覚は、新たな整理の仕方そのものを生み出す可能性を持つ。価値があるのは確定性ゆえでなく、発見の入口となる働きゆえである。

別解例②

「似ている」という感覚は基準が不明確で不安定に見えるが、本文はそこに、未知のものと既知のもののあいだの関係を先取りする力を見ている。まだ言葉にならない共通性を先に感じるからこそ、新しい分類や理解が始まることがある。したがって、その感覚は未完成ではあっても、分類に先立つ重要な足場として評価されているのである。

■自己採点チェック

- ・ 類似感覚が「発見の入口」になる点に触れているか
- ・ 分類との違いを対比的に書けているか
- ・ 曖昧だから価値が低い、という理解になっていないか

問五

本文の立場に立ち、分類が思考を助けながらも、同時に思考を誤らせうるのはなぜか。説明せよ。

模範解答

分類は、対象に秩序を与えて世界を扱いやすくし、思考を進める助けとなる。しかしその分類は、何を似ているとみなすかという判断に支えられており、その見方が粗いままなら、表面的な共通性を深い共通性を取り違い、重要な違いを見落とす危険がある。分類は理解の足場になるが、その足場を吟味しないと、未知のものを既知の箱へ押し込める働きにも変わりうるからである。

別解例①

分類は、複雑な対象を整理し、共通性や反復を捉えやすくする点で思考を助ける。だが同時に、分類を成り立たせている「似ている」という感覚が十分に確かめられていないと、表面上の印象から安易に同類と見なし、そこから先の検討を止めてしまう。つまり分類は、秩序を与える力と、違いを見えにくくする力とをあわせ持っているのである。

別解例②

本文によれば、分類は世界を分かりやすくする技術であり、何が共通しているかを確かむうえで有効である。だが、人は「似ている」と感じると安心し、その接続をもって理解が完了したと思いやすい。すると分類は、新しいものを理解するための手がかりであるはずなのに、かえってそれを古い枠の中へ閉じ込める方向に働く。助けにも誤りにもなりうるのはそのためである。

自己採点チェック

- ・ 分類の「助け」と「危うさ」の両面を書けているか
- ・ 「何を似ているとみなすか」という判断に触れているか
- ・ 未知のものを既知の箱へ押し込める危険まで届いているか

【核心をことばにする 記入例】

対象文

未知のものを既知へ接続することは必要だが、その接続をもって理解が完了したと考えるとき、似ているという感覚は、新しいものを古い箱へ押し込める働きに変わる。

① 事実

未知のものを、すでに知っているものと結びつけて理解することは必要だと述べている。

しかし、その結びつきだけで分かったつもりになると、新しいものを古い理解の枠の中へ入れてしまうとも述べている。

② ここから言えそうなこと

似ていると感じることは理解の出発点にはなるが、それだけで理解が終わったと考えると、本来の新しさや違いを見落としやすいと言える。

③ 言いすぎになりそうなこと

- 何かを既知のものと結びつけて考えると、その時点で新しい理解はほとんど失われてしまう。

- 似ているという感覚は便利だが、未知のものを理解するうえでは、たいてい古い見方を強める方向へ働きやすい。

- 人は似ているものを見つけると安心するため、その安心が生じた段階で、理解はかなりの程度止まりやすい。

- 新しいものを本当に理解するには、既知のものと接続をいったん疑い、できただけ離れて見るほうが望ましい。

④ つまりどういうことだと言えるか

未知のものを分かるためには、まず知っているものとのつながりを手がかりにする必要がある。ただし、そのつながりだけで十分だと思うと、新しいものを古い理解の中でしか見られなくなる。

【第三問】 箱の底

土曜の午後、押し入れの中段に置かれた段ボール箱を取り出したとき、村瀬は、その箱が思ったより軽いことにまず驚いた。軽いということは、捨てるには好都合なはずだった。重いものほど処分には手間がかかるし、軽いものなら、玄関まで運ぶのも、回収場所へ持っていくのも容易である。だが実際には、その軽さはむしろ村瀬の手を鈍らせた。中身が少ないということは、ひとつひとつの物の輪郭がはっきりしているということであり、はっきりしているものは、まとめて「不要品」と呼びにくい。

段ボール箱の側面には、以前の引っ越しのときに油性ペンで書いた文字がまだ残っていた。「机まわり・小物」。その曖昧な分類が、今となっては少し腹立たしく思えた。机まわり、という言い方には、そこに入っている物の性格を正確に言い当てる気が最初からない。小物、というのはさらにひどい。人は名前を与えにくいものを、しばしば「小物」と呼ぶ。そこに含まれているのは、重要でないものではなく、むしろ重要かがまだ決められていないものなのだと、村瀬は以前から思っていた。

箱の中には、古い電卓、インクの切れた万年筆、学生時代の定期入れ、金属の薄いしおり、どこでもらったのか思い出せないホテルのボールペン、そして革の表紙が擦れて角の丸くなった小さな手帳が入っていた。どれも使っていない。使っていないどころか、これから使う見込みもほとんどない。万年筆のペン先には古いインクが固まり、電卓の表示は半分欠けている。定期入れに差したままになっていた乗車券は、印字が薄れて日付も読めなかった。

それでも村瀬は、それらを「壊れている」とは思わなかった。実際には壊れているのだろうが、その言い方をすると、物の役目がすでに終わっていることを、自分の口で認めてしまうような気がしたからである。役目が終わったものを捨てるのは、ある意味では理にかなっている。だが、役目が終わったことと、その物との関係が

終わることとは、同じではないようにも思われた。

台所のほうから、食器の触れ合う音がした。姉の千春が、昼食のあと片づけをしているのだろう。今日は母の三回忌を前にして、実家の細かな整理を進めるために帰ってきていた。村瀬一人では手をつけずにいた押し入れも、千春が来たことで「そろそろ片づけようか」という話になったのである。その「そろそろ」が、どこから来た言葉なのか、村瀬には分からなかった。時間が経ったからなのか、法事が近いからなのか、それとも千春が口にしたからなのか。だが、何かを片づけるには、たいていそういう曖昧な「そろそろ」が必要なのだということも知っていた。

千春は、物をため込まない人だった。村瀬が大学を出て一人暮らしを始めた年も、部屋を引き払う前日に、使わない食器や古い雑誌を迷いなくまとめていた。「置いておく理由がないでしょ」というのが、そのときの千春の言葉だった。村瀬はその言い方に少し反発を覚えたが、反発したところで、置いておく理由をうまく説明できたわけではなかった。

箱の底に、小さな缶があった。飴の入っていた缶らしく、ふたに青い花の絵が描かれている。中には、ネジや金具のようなものがいくつか入っていた。どの家具の部品なのかも分からない。村瀬は缶を振ってみた。乾いた音が鳴る。必要かどうか分からないものを、人はしばしば処分し損ねる。必要だから残しているのではなく、不要だと言い切るだけの確信がないから残しているのだ。その中途半端さが、物を長持ちさせることがある。

「それ、まだあるんだ」

いつのまにか、千春が押し入れの前に立っていた。村瀬の手元をのぞき込み、手帳のほうを指した。

「どれ」

「黒いやつ。お母さん、いつも買い物のメモ書いてたでしょ」

村瀬は手帳を開いた。最後のほうのページに、醤油、洗剤、切手、という文字が並んでいる。母の字であることはすぐに分かった。几帳面というほど整ってはいな

いが、書き急いだ線の勢いに見覚えがあった。

「そうだったかな」

と村瀬は言った。忘れていたわけではない。だが、覚えていたとも少し違った。千春の言葉で、手帳はただの古い文具から、母が使っていた物へと少しだけ位置を変えた。その変化が、村瀬には居心地悪くもあり、ありがたくもあった。

「それは捨てないでしょ、さすがに」

千春はそう言って笑った。笑いながらも、念を押すような調子があった。村瀬は、その「さすがに」という語が指している範囲を考えた。母の字があるものは捨てない、ということなのか。思い出せる来歴のあるものは残す、ということなのか。それとも、手帳のように、一見して人の生活の匂いが残っているものだけは別だ、ということなのか。どれであってもおかしくないし、どれでもないのかもしれないなかった。

「万年筆は？」

と村瀬は聞いた。

「それは使わないんでしょ」

「使わないけど」

「じゃあ、なくても困らないじゃない」

千春は当然のように言った。言い方はやわらかいが、内容は明確だった。村瀬は万年筆を持ち上げ、キャップをひねった。開かない。以前にも試したことがあり、そのときも開かなかったことを思い出した。思い出したが、だからといって今回すぐに捨ててよいという気にはならない。壊れていることが分かってもなお残したいと思うのは、もはやその物に用があるからではなく、その物を残しておく自分の感覚のほうに用があるからなのかもしれない、と村瀬は思った。

「困るとか困らないとかだけでもないだろ」

口にしてから、その言葉が少し子どもじみて聞こえた。千春もそう思ったのか、すぐには返事をしなかった。代わりに、押し入れの襖の縁に手を置き、そこに積も

った細い埃を指先でなぞった。

「まあね」と、千春はやがて言った。「でも、置いておけば残るってもでもないし」

その一言は、村瀬にはすぐに分らなかった。残るってもでもない、というのは、物のことを言っているのか、記憶のことを言っているのか。村瀬が返事をしないうちに、千春は「お茶いれるけど飲む？」と言って台所へ戻っていった。話が終わったのか、途切れただけなのかも、はつきりしなかった。

村瀬は手帳を閉じ、万年筆を箱の外へ出し、それからまた箱の中へ戻した。電卓も一度手に取って、同じように戻した。捨てるものと残すものを分けるために箱を開けたのに、作業はいつのまにか「いったん外へ出す」「少し見る」「元へ戻す」の繰り返しに変わっていた。整理というより、確認に近い。何を確認しているのかは、自分でもよく分からない。ただ、そこにある物が、まだ自分の中で完全に名前を失ってはいいことだけは確かめている気がした。

窓の外では、隣家の庭木が風に揺れていた。枝の先だけが光って見える。村瀬は、急ぐ理由があるわけではないのに、片づけという行為の中には、いつもどこか急がねばならない感じが混じるのはなぜだろうと思った。早く片づけたほうがよい、という圧力は、誰かに言われる前から、自分の中にもある。しかし一方で、片づけるということは、ただ物を減らすことではなく、その物に与えていた意味を少しずつ剥がすことでもあるのだから、そんなに手早くできるはずもない。

千春が湯のみを二つ持ってきた。村瀬の横に座り、何も言わずに一つ渡す。茶の表面に薄く湯気が立っている。

「それ、持って帰るなら持って帰れば」

千春は箱の中身を指して言った。言い方は投げやりではなく、どちらでもよいというようでもあった。

村瀬はうなずいた。持って帰る、と言われると、捨てるか残すかとは別の向きが生じる。実家に置いたままなのか、自分の部屋へ移すのか。その違いは大きいはず

なのに、今まで考えていなかったことが少し不思議だった。

手帳は持って帰るのだろう。たぶん。では万年筆はどうか。定期入れは。缶は。問いは増えたのに、決定はひとつも進んでいない。だが、進んでいないことが、そのまま停滞とも言い切れない気もした。何かを捨てるか残すか決める前に、まずそれが自分にとってどういう位置にあるのかを見直す時間が要るのだとすれば、この迷いにも一応の役目はあるのかもしれない。

箱の中身は、見たところ、何も変わっていない。それでも村瀬には、開ける前は少し違う箱に見えた。片づけとは、物を減らすことより先に、そこに入っているものの意味を、いったんばらばらに見直すことなのかもしれない。

設問

問一

本文の理解として最も適切なものを一つ選べ。

ア 村瀬は箱の中身を捨てられない理由を最初から明確に自覚しており、それを千春にも一貫して説明できている。

イ 村瀬にとって箱の中の物は、実用性を失っていても、ただ壊れた不要品とはい切れない位置にあり、その意味づけは作業の途中で少しずつ揺れ動いている。

ウ 千春は村瀬よりも母の記憶に強く執着しており、そのため物を整理することそのものに否定的である。

エ 本文は、物を残すか捨てるかの基準を、最終的に母の使用歴の有無へと明確に収束させている。

問二

本文の叙述に関する理解として最も適切でないものを一つ選べ。

ア 本文では、物の状態ややり取りの事実だけでなく、それに対する村瀬の受け取り方が前景化されている。

イ 千春の発言は、村瀬に比べて整理の基準が明快であるように見えるが、その言葉の意味も一義的に固定されてはいない。

ウ 村瀬は、手帳や万年筆に対する自分の感覚を、本文の中でほぼ矛盾なく一つの考えへまとめ上げている。

エ 箱の中身が物理的には変わっていないのに「少し違う箱に見えた」とされることで、整理が単なる物の移動ではないことが示唆されている。

問三

本文において、村瀬が物を「壊れている」と言い切りにくいのはなぜか。説明せよ。(150字程度)

問四

本文の立場に立ち、「片づけ」とは単に物を減らすことではないとされるのはなぜか。村瀬の作業の変化に触れながら説明せよ。(190字程度)

【核心をことばにする】

次の一節を読み、①～④に答えなさい。

対象文

片づけるということは、ただ物を減らすことではなく、その物に与えていた意味を少しずつ剥がすことでもあるのだから、そんなに手早くできるはずもない。

① 事実

本文では何が述べられているか。

② ここから言えそうなこと

③ 言いすぎになりそうなこと

④ つまりどういうことだと言えるか

解答・解説

【全体総括】

本章は、押し入れの箱を前にした村瀬のふるまいを通して、物を「残す／捨てる」という判断が、単なる実用性の問題ではなく、その物に与えてきた意味の問題でもあることを描く物語である。箱の中身は、古い電卓、万年筆、定期入れ、手帳など、どれももはや生活の上では必要性が薄い。にもかかわらず村瀬は、それらを単純に「壊れている」「不要品である」と言い切ることができない。

本文の核心は、村瀬が物を前にして、実用性・来歴・記憶・自分との関係を、まだ一つの基準へ整理し切れていない点にある。千春は比較的明快な整理の言葉を口にするが、その言葉もまた一義的ではなく、村瀬にとっては「基準」そのものよりも、「その物が自分にとってどんな位置にあるか」を見直す契機として働いている。後半では、村瀬の作業が「捨てる／残すを決める」ことから、「いったん外へ出し、見て、戻す」という確認へと変化していく。ここで片づけは、単に物を減らすことではなく、物にまわりついていた意味をばらし、その位置づけを見直す営みとして捉え直される。

読解のポイントは、

- ・ 村瀬が物を「壊れている」と言い切れない理由
 - ・ 千春の言葉が、単なる整理の圧力ではなく、意味の再配置の契機になっていること
 - ・ 物理的には変わらない箱が「少し違う箱」に見える意味
 - ・ 片づけが、処分の作業である前に、関係の整理であること
- を見抜けるかどうかにある。

問一

正答…イ

アは誤り。村瀬は、物を捨てられない理由を最初から明確に自覚しておらず、千春

にも一貫して説明できていない。むしろ、作業の途中で自分の感覚を少しずつ確かめている。

ウも不適切。千春は母の記憶にまったく無関心ではないが、物を整理すること自体に否定的ではなく、むしろ整理を進める側に立っている。

エも誤り。本文は、母の使用歴の有無だけを基準として明確に収束してはいない。手帳が特別な位置を持つのは確かだが、万年筆など他の物もお揺れている。

したがって、実用性を失っていても「ただの不要品」と言い切れず、その意味づけが途中で揺れ動いているとするイが最も適切である。

問二

正答…ウ

アは適切。本文は、物の状態ややり取りの事実に加えて、それを村瀬がどう受け取っているかを強く前景化している。

イも適切。千春の言葉は比較的明快に見えるが、「さすがに」や「置いておけば残っているものでもない」など、その意味は村瀬にとって一義的に定まらない。

エも適切。箱の中身が物理的には同じなのに「少し違う箱に見えた」とされることで、片づけが意味の見直しを含むことが示されている。

ウだけが不適切で、村瀬はむしろ、自分の感覚を一つの考えへまとめきれていない。本文の魅力は、そのまとまりきらなさそのものにある。

問三

本文において、村瀬が物を「壊れている」と言い切りにくいのはなぜか。説明せよ。

模範解答

村瀬にとって箱の中の物は、実用性を失っていても、ただ機能を終えた物として処理し切れるものではないからである。「壊れている」と言い切ることは、物の役目が終わっただけでなく、その物との関係まで終わったと自分で認めることに近く感じ

られるため、彼は実用性の低下を知りつつも、その言い方を避けている。

別解例①

物が使えないこと自体は村瀬にも分かっているが、それを「壊れている」と名づけると、機能の停止だけでなく、その物に残していた位置づけまで切ってしまう感じがあるからである。彼にとって問題なのは便利か不便かだけでなく、その物が自分の記憶や感覚とまだつながっている点にあり、その関係を簡単に終わらせられないのである。

別解例②

村瀬が「壊れている」と言いにくいのは、その言葉が物の状態だけでなく、その物を残しておく理由の消滅まで含んでしまうように感じられるからである。実際には使えず、今後使う見込みも薄いのが、それでもなお手放せないのは、役目が終わったことと、自分との関係が終わることとを同一視できないためである。

■自己採点チェック

- ・ 「役目が終わる」と「関係が終わる」の区別に触れているか
- ・ 実用性だけでは処理し切れないことを書けているか
- ・ 「壊れている」が単なる状態描写以上の意味を持つと捉えられているか

問四

本文の立場に立ち、「片づけ」とは単に物を減らすことではないとされるのはなぜか。

村瀬の作業の変化に触れながら説明せよ。(190字前後)

模範解答

本文で片づけが単なる処分ではないとされるのは、村瀬の作業が「捨てる／残すを決める」ことから、「いったん箱の外へ出し、見て、また戻す」という確認へ変わっていくからである。彼は物の実用性だけでなく、その来歴や自分との関係を見直しており、片づけの過程で、物理的な整理以前に、その物が自分にとってどんな位置にあるかを問い直している。片づけとは、意味の再配置を伴う作業なのである。

別解例①

片づけが単に物を減らすことでないのは、村瀬が作業を進めるうちに、処分の判断よりも、物の位置づけを確かめることのほうへ移っていくからである。彼は箱の中身をいったん外へ出して眺め、すぐ捨てずに戻す。そこでは、使うかどうかより、母の痕跡や自分とのつながりが見直されている。つまり片づけは、不要品処理ではなく、物に与えていた意味をいったんばらし、組み替える営みとして描かれている。

別解例②

本文での片づけは、物を減らす作業というより、物にまわりついていった意味を一度ほどいていく過程として描かれる。村瀬は最初、箱の中身を処分対象として扱おうとするが、手帳や万年筆に触れるうちに、実用性だけでなく記憶や感覚との関係を考え始める。そのため作業は、選別より確認へと変わる。片づけとは、物を動かす前に、自分の中でその物の位置を見直すことでもある。

■自己採点チェック

- ・ 作業が「捨てる／残す」から「確認」へ変わることに触れているか
- ・ 実用性だけでなく、来歴や自分との関係を見直していると書いているか
- ・ 「意味の再配置」「位置づけの見直し」といった方向まで届いているか

【核心をことばにする 記入例】

対象文

片づけるということは、ただ物を減らすことではなく、その物に与えていた意味を少しずつ剥がすことでもあるのだから、そんなに手早くできるはずもない。

① 事実

片づけは、物を減らすだけの作業ではないと述べている。
そこには、その物に自分が与えていた意味を少しずつはがしていく面もあるので、簡単には進まないとも述べている。

② ここから言えそうなこと

片づけが進みにくいのは、物の数や重さの問題だけでなく、その物との関係の整理も同時に起こっているからだと言える。

③ 言いすぎになりそうなこと

- ・ 片づけが難しいのは、ほとんどの場合、物そのものよりも、そこに込めた記憶や感情を失うことに近いからだ。
- ・ 人が物を手放せないとき、そこでは実用性よりも意味のほうがかたい決定的に大きな比重を占めている。
- ・ 片づけの遅さは、物を減らす技術の問題ではなく、その人が過去とどこまで離れられるかという問題として見るほうが自然である。
- ・ 物を整理する作業は、結局のところ、自分がその物とどういう関係を結んできたかを、一つひとつ解体し直す作業でもある。

④ つまりどういうことだと言えるか

片づけとは、物を処分することだけでなく、その物を自分の中でどう位置づけてきたかを見直すことでもある。だから、それは見た目ほど機械的には進まないのである。

【第四問】 上達とは何か

文章△

上達という言葉は、しばしば「できなかったことができるようになること」として理解される。たしかに、それは間違っていない。弾けなかった曲が弾けるようになる、届かなかった球に手が届くようになる、書けなかった線が書けるようになる。その変化は目に見えやすく、本人にも周囲にも分かりやすい。しかし、上達をそのような成果の変化だけで捉えようと、その手前にある見えにくい過程を取り落とすことになる。

多くの技術において、最初に求められるのは型である。型とは、先人の経験によって整理された動きの道筋であり、身体や思考を一定の方向へ導くための枠組みである。初心者にとって、型はしばしば窮屈に感じられる。なぜこの手順でなければならないのか、なぜこの姿勢を守らなければならないのか、その理由は初めから十分には見えない。だが、見えないからこそ、型は必要になる。自分の感覚だけでは、まだ何がずれているのかを測る物差しを持っていないからである。

反復は、この型を外側の規則から内側の感覚へ移す過程である。最初は意識しなければできなかった動きが、繰り返すうちに少しずつ身体の側へ移る。指の位置、呼吸の間合い、力の抜け方、視線の置き方。そうした細部は、頭で理解するだけでは身につかない。むしろ、何度も同じことをする中で、同じだと思っていた動きが実は同じではないことに気づく。その気づきが、上達の始まりである。

反復というと、機械的な繰り返しを思い浮かべる人もいるだろう。しかし、意味ある反復は、同じことをただ数多く行うことではない。むしろ、一回ごとの差を感じ取るために、あえて同じ型へ戻るのである。書道で同じ一画を何度も書くとき、演奏で同じ小節を繰り返すとき、そこには「同じことをしている」というより、「同じにしようとしても同じにならない自分の動きを見る」という働きがある。型があるからこそ、微細なずれが見えてくる。

この意味で、上達とは、自由に動けるようになる前に、まず不自由さを引き受けることである。初めから自分らしくやろうとすれば、たいていの場合、自分の癖をそのまま強めるだけになる。型は、その癖を一度外から照らし、身体に別の通り道を教える。窮屈さは、ただの抑圧ではない。それは、自分では気づけない偏りを修正するための仮の不自由である。

もちろん、型だけで上達が完結するわけではない。どれほど正確に型を守っても、それが目的を失った反復になれば、技術は硬くなる。だが、型を経ずに「自由」を求めることは、多くの場合、自由ではなく未熟な偶然にとどまる。上達とは、まず型に身を預け、その型を通して自分の感覚を育てることである。型が身体に入ったとき、人は初めて、型の内側で細かく感じ、細かく選ぶことができるようになる。上達とは、できることが増えることだけではない。

同じことの中に、以前は見えなかった違いが見えるようになることもある。

文章

上達を語るとき、型や反復の重要性が強調されることは多い。たしかに、何の型も持たず、ただ気分のままに動いていては、技術は安定しない。楽器でも、料理でも、スポーツでも、基礎的な手順や姿勢を身につけることには大きな意味がある。だが、上達を型へ近づくこととしてだけ考えるなら、その人の動きが生きたものになる瞬間を捉え損ねる。

型は、動きを整える。しかし同時に、動きの可能性を見えにくくすることもある。ある弾き方、ある打ち方、ある書き方が「正しい」とされると、人はそこから外れたものをすぐに誤りとして扱いやすい。もちろん、実際に誤りである場合もある。だが、すべての逸脱が未熟さを示すわけではない。ときに、型から少し外れた動きの中に、その人の身体や状況に合った別の道筋が見えることがある。

遊びや崩しは、この別の道筋を探るために必要である。ここでいう遊びとは、単にふざけることではない。身につけた型を少しずらし、速さを変え、力の入れ方を

変え、順序を変えてみることで、その型が何を支えていたのかを確かめる働きである。型を忠実になぞっているだけでは、型の意味はかえって見えにくい。少し外してみることで、どこを外すと崩れ、どこを外しても生きているのが分かってくる。

たとえば、料理でレシピ通りに作れるようになった人が、ある日少し火加減を変えてみる。音楽で楽譜通りに弾けるようになった人が、わずかに間を揺らしてみる。

スポーツで基本フォームを身につけた人が、相手や状況に応じて重心をずらしてみる。そこには、型を捨てるのではなく、型を問い直す動きがある。上達とは、型から自由になることではなく、型を使って状況に応じる力を得ることだとも言える。

ただし、崩しは、型を知らない者の気ままさとは違う。型を持たないまま逸脱しても、それは何から外れているのかが分からない。そこには発見よりも偶然が多くなる。意味ある崩しは、すでに身につけた型との関係の中でのみ生じる。だから、崩すことは型を否定することではない。むしろ、型を本当に理解するための別の方法である。

上達した人の動きには、しばしば余白がある。正確でありながら、硬くない。基準から大きく外れてはいないのに、その人自身の呼吸や判断が入っている。これは、型を忘れたからではなく、型を支えとして使えるようになったからである。型に従う段階では、型が人を動かす。型を使える段階では、人が型を通して状況に応じる。

上達とは、型へ近づくことだけではない。

型を支えにしながら、その場に必要ない動きを自分で見つけられるようになることもある。

設問

問一

文章A・Bの両方に共通する立場として最も適切なものを一つ選べ。

A 上達には型や基礎的な手順が重要であり、気分のままに動くだけでは技術は安定しにくい。

I 上達とは、型を正確に守り続けることであり、そこから外れる動きは未熟さの表れである。

U 上達とは、型を早く離れ、自分らしい動きを自由に作り出せるようになることである。

E 上達には反復よりも発見が重要であり、決まった手順に従うことは技術の停滞につながる。

問二

文章Aと文章Bの相違を最も精確に説明しているものを一つ選べ。

A Aは型を通じて微細な差を感じ取れるようになる過程を重視し、Bは型を支えにしながら状況に応じた動きを見つける過程を重視している。

I Aは型を上達の最終到達点と考え、Bは型を上達の妨げとして完全に否定している。

U Aは上達を身体の問題として捉え、Bは上達を主に知識や理論の習得として捉えている。

E Aは反復による正確さを重視するため自由を認めず、Bは自由を重視するため正確さを不要とみなしている。

問三

文章Bの立場から文章Aに向けられうる批判として最も適切なものを一つ選べ。

ア 型の反復を重視するあまり、型を少し外してみることで、その型が何を支えているのかを確かめる働きが見えにくくなるのではないか。

イ 型を重んじることは、結局のところ、個人の身体差や状況の違いをすべて無視することになるのではないか。

ウ 反復を通じて感覚を育てるという考え方は、技術を偶然に任せる危険を含んでいるのではないか。

エ 型を身につけることは、上達において不要な遠回りであり、初めから自分の動きを探すべきではないか。

問四

文章△において、反復は単なる機械的な繰り返しではないとされる。なぜか、説明せよ。(140字前後)

問五

文章△・Bはいずれも型を重視しているが、その型の働きの捉え方はどのように異なるか。両者の違いが分かるように説明せよ。(170字前後)

【核心をことばにする】

次の一節を読み、①～④に答えなさい。

対象文

型を忠実になぞっているだけでは、型の意味はかえって見えにくい。少し外してみることで、どこを外すと崩れ、どこを外しても生きているのが分かってくる。

① 事実

本文では何が述べられているか。

② ここから言えそうなこと

③ 言いすぎになりそうなこと

④ つまりどういうことだと言えるか

解答・解説

【全体総括】

本章は、「上達」という同じ主題を、型と反復の側面から論じる文章△と、崩しや遊びの側面から論じる文章□とを比較する二資料問題である。

文章△は、上達を、型を反復することで外側の規則を内側の感覚へ移していく過程として捉えている。型は初心者にとって窮屈に感じられるが、自分では気づけない癖やずれを照らし、微細な違いを感じ取るための基準として働く。したがって△では、上達とは「できることが増えること」だけでなく、「同じことの中に違いが見えるようになること」とされる。

これに対して文章□は、型を身につけることの重要性を認めつつも、型へ近づくことだけでは上達を捉えきれないとする。型を少し外し、速さや力や順序を変えてみることで、その型が何を支えていたのかが見えてくる。□において上達とは、型を捨てることではなく、型を支えにして状況に応じた動きを見つけられるようになることである。

読解の核心は、

- A・Bともに型を軽視していないこと
- △は型を通じた感覚の育成を重視すること
- □は型を支えにした逸脱や応用を重視すること
- 反復と崩しを、単純な対立ではなく、上達の異なる局面として読むことにある。

問一

正答：ア

文章△・□はいずれも、型や基礎的な手順の重要性を認めている。△は型を外側の規則から内側の感覚へ移す過程として重視し、□も、型を持たないままの逸脱は気ままさや偶然にとどまりやすいと述べている。

イはBに合わない。Bは型から外れる動きがすべて未熟だとは考えていない。
ウも不適切。Bも「型を早く離れよ」とは述べておらず、型を持ったうえで崩すことを重視している。

エはA・Bいずれにも合わない。Aは反復を重視し、Bも決まった手順や基礎を否定していない。

問二

正答…ア

Aは、反復によって型を身体の内側へ移し、微細なずれや違いを感じられるようになることを重視している。Bは、型を身につけたうえで、それを少し外したり崩したりすることにより、状況に応じた動きを見つけることを重視している。したがってAが最も精確である。

イは対立を強めすぎている。Aは型だけで上達が完結するとは言っておらず、Bも型を完全否定していない。

ウも不適切。AもBも身体や感覚に関わる議論であり、Bが知識や理論の習得を中心としているわけではない。

エも誤り。Aは自由を否定せず、Bも正確さを不要とはしていない。

問三

正答…ア

Bの立場からAへ向けられうる批判は、型を反復するだけでは、型が何を支えているのか、どこを外すと崩れ、どこを外しても生きるのが見えにくくなるのではない、というものである。したがってAが最も適切である。

イは強すぎる。Aは個人差や状況差をすべて無視しているわけではない。

ウは逆方向の批判である。Aは偶然に任せるのではなく、型によって感覚を育てる立場である。

エはBにも合わない。Bは型を不要な遠回りとは考えておらず、意味ある崩しは型との関係の中でのみ生じるとしている。

問四

文章Aにおいて、反復は単なる機械的な繰り返しではないとされる。なぜか、説明せよ。

模範解答

文章Aでは、反復は同じ動作をただ数多く行うことではなく、型へ戻ることによっての微細なずれを感じ取る過程だとされる。指の位置や力の抜け方などは頭で理解するだけでは身につかず、繰り返す中で「同じにしようとしても同じにならない」自分の動きが見えてくる。反復は、型を通して感覚を育てる働きを持つのである。

別解例①

文章Aが反復を機械的な作業と見なさないのは、そこでは同一の動きを量だけこなすのではなく、毎回の差を感じる目が育つからである。同じ一画や同じ小節を繰り返すことで、以前は気づかなかった力みや呼吸のずれが見えてくる。反復は、外から与えられた型を、身体の内側で感じ分けるための訓練なのである。

別解例②

文章Aにおいて反復とは、型をなぞりながら自分の動きを観察することでもある。同じことをしているつもりでも、実際には姿勢や力加減、間合いが少しずつ違う。その違いは、型という基準があるからこそ見えてくる。したがって反復は単調な反復ではなく、感覚の精度を高めるために同じ場所へ戻る営みなのである。

■自己採点チェック

- ・ 反復を「数をこなすこと」としてだけ捉えていないか
- ・ 型があるから微細なずれが見える点に触れているか
- ・ 感覚を育てる過程として説明できているか

問五

文章A・Bはいずれも型を重視しているが、その型の働きの捉え方はどのように異なるか。両者の違いが分かるように説明せよ。

模範解答

文章Aでは、型は初心者の癖やずれを照らし、反復を通じて外側の規則を内側の感覚へ移すための基準として働く。型に従うことで、同じことの中の微細な違いが見えるようになる。これに対し文章Bでは、型は守る対象であるだけでなく、少し外すことでその働きを確かめ、状況に応じた動きを見つけるための支えでもある。Aは型による感覚の育成を、Bは型を用いた応用と崩しを重視している。

別解例①

文章Aにおける型は、自分だけでは測れない癖や偏りを修正し、繰り返すことで身体に別の通り道を作るものとして捉えられる。つまり型は、上達のためにまず身を預ける基準である。一方、文章Bにおける型は、身につけた後に少しずつすることで、どこが本質でどこが変えられる部分かを知る手がかりとなる。Aは型へ入ること、Bは型を使って状況へ応じることに重点を置いている。

別解例②

Aでは、型は外から与えられる窮屈な枠でありながら、反復によって身体の内側に入り、感覚を細かくする働きを持つ。上達は、型の中で違いを見分けられるようになることにある。Bでは、型はそのまま守り続ける完成形ではなく、あえて崩してみることの意味が見えてくる支点である。したがってAは型を身につける過程を、Bは型を支えとして動きを開く過程を中心に見ている。

■自己採点チェック

- ・ Aの型を「反復・感覚の育成」と結びつけているか
- ・ Bの型を「崩し・応用・状況への対応」と結びつけているか
- ・ AとBを単純な「型重視／自由重視」の対立にしていないか

【核心をことばにする 記入例】

対象文

型を忠実になぞっているだけでは、型の意味はかえって見えにくい。少し外してみること、どこを外すと崩れ、どこを外しても生きているのかが分かってくる。

① 事実

型をただ正確になぞるだけでは、その型が何を支えているのかは見えにくいと述べている。少し型を外してみることで、型の中で変えてはいけない部分と、変えても成り立つ部分が分かると述べている。

② ここから言えそうなこと

型を理解するには、ただ守るだけでなく、あえて少しずらしてみること、型の働きや大事な部分を確かめることが必要だと言える。

③ 言いすぎになりそうなこと

- 型を本当に理解するためには、忠実に守る段階よりも、むしろ崩してみる段階のほうが重要である。
- 型をなぞっているだけでは、その型の意味はほとんど身につかず、実際に外してみても初めて理解が始まる。
- 上達において大切なのは、型を正しく守ることよりも、どこまでなら崩せるかを自分で試す力である。
- 型を外しても生きている部分を見つけることができれば、その人は型に従う段階を越えたと言える。
- 型を少し外す経験がない上達は、結局のところ、状況に応じる力を欠いた硬い技術にとどまりやすい。

④ つまりどういうことだと言えるか

型はただ守るだけでは、その働きが見えにくい。少しずらしてみること、型の中で本当に大切な部分と、変えてもよい部分が分かってくる。

【第五問】 街の保存と更新

古い街並みを残そうとする運動が起るとき、人々はしばしば「この風景を守りたい」と言う。木造の商家、狭い路地、瓦屋根、軒先に置かれた植木鉢、夕方になると灯る古い看板。そうしたものは、ただ建物や道の形として存在しているだけではない。そこには、長く積み重ねられた生活の気配があり、歩く人の記憶が染み込んでいる。だから街並みの保存は、単に古い物件を維持することではなく、人々が自分の場所を失わないための試みとして語られる。

しかし、保存という言葉は、思ったほど単純ではない。何かを保存するとは、今ある形をそのまま未来へ運ぶことだと思われやすい。だが、街は博物館の展示物とは異なる。そこには今も人が住み、働き、商いをし、通り過ぎていく。屋根は傷み、道路は狭く、古い配管は取り替えを必要とする。生活の場である以上、街は変化せざるをえない。変化をすべて止めてしまえば、街は残るところか、使われなくなり、やがて空洞化していくこともある。

たとえば、ある商店街で古い看板や店構えを残そうとする場合を考えてみよう。外観を保存することは、その通りの印象を保つうえで大きな意味を持つ。だが、店主が高齢になり、後継者がいなくなり、来客も減っているなら、看板だけを残しても、そこにあった商いの時間は戻らない。形が残ることで記憶は呼び起こされるが、形だけが残ることで、かえって生活が失われたことが目立つ場合もある。保存とは、形を守ることだけでは足りないのである。

一方で、更新という言葉も、必ずしも破壊を意味しない。古い建物を改修し、新しい用途に合わせて使い続けることがある。昔の倉庫が図書室になり、銭湯だった建物が小さな劇場になり、空き家が共同の作業場になる。そこでは、もとの用途は失われている。だが、建物の質感や街の中での位置は、新しい使われ方の中で別の命を得る。これは、過去を消し去ることではなく、過去を現在の生活に接続し直すことだと言える。

もつとも、更新が常によいわけでもない。古い街並みを利用して人を集めようとするとき、保存はしばしば演出へと変わる。生活の必要から残されてきた路地や店構えが、「懐かしい風景」として整えられ、写真を撮るための背景になる。そこで暮らす人々の不便や、商売の苦労や、建物を維持する手間は見えにくくなる。外から訪れる人にとって魅力的な街並みが、そこに住む人にとっては使いにくい舞台装置になってしまうこともある。

このように考えると、街を保存するとは、過去の形をそのまま凍らせることではない。むしろ、何を残せばその街らしさが保たれるのかを、その都度考えることに近い。建物の外観なのか、道の細さなのか、店と客との距離なのか、人が立ち止まりやすい空気なのか。それらはすべて同じように保存できるわけではない。あるものを残すために、別のものを変えなければならぬこともある。

ここで難しいのは、街らしさというものが、はっきりした一つの要素に還元しにくいことである。街らしさは、建物の年代だけで決まるわけでも、住民の記憶だけで決まるわけでもない。そこには、素材の手触り、音の響き、道の曲がり方、人の通り方、店先で交わされる挨拶、季節ごとに変わる匂いなど、多くの要素が重なっている。だから、何か一つを保存すれば街が残るとは言いにくい。

それでもなお、何も残そうとしなければ、街は簡単に均質化する。どの駅前にも似たような建物が立ち、どの通りにも同じような看板が並び、歩いていても自分がどこにいるのか分からなくなる。便利で清潔で効率的な空間は、多くの人にとって必要である。しかし、それだけで街が成り立つなら、人は特定の場所に愛着を持つ必要がなくなる。街を守るとは、単に古さを礼賛することではなく、場所が場所として記憶されるための手がかりを失わないようにすることでもある。

保存と更新は、対立する言葉のように見える。だが実際には、両者はしばしば絡み合っている。保存のために改修が必要になることがあり、更新の中でこそ古いものが使われ続けることもある。重要なのは、古いか新しいかを選ぶことなく、何を残し、何を変えることで、その場所の時間が途切れずに続くのかを考えること

である。

街は、過去をそのまま置いておく器ではない。また、未来のために過去をすべて取り払う空白でもない。街を守るとは、残すことと変えることのあいだで、その場所がなお生きて使われる道を探すことなのだ。

設問

問一

本文の主張を最も精確に再構成しているものを一つ選べ。

ア 街を保存するとは、古い建物や街並みをできるだけ変えずに残し、過去の形を未来へそのまま伝えることである。

イ 街を更新することは、古いものを失わせる危険を持つため、保存を重視するならば避けるべきである。

ウ 街を守るとは、古いか新しいかを選ぶことなく、何を残し何を変えることで、その場所が生きて使われ続けるかを考えることである。

エ 街らしさは住民の記憶に支えられるため、建物や道の形よりも、そこに暮らす人々の思いを残すことが重要である。

問二

本文の立場からみて、最も適切でないものを一つ選べ。

ア 外観を保存しても、そこにあった商いや生活が失われていけば、形だけが残ることもある。

イ 古い建物を新しい用途に合わせて使い続けることは、過去を現在の生活へ接続し直す形にもなりうる。

ウ 観光客にとって魅力的に整えられた街並みは、必ずそこに住む人々にとっても使いやすい保存の形になる。

エ 街らしさは一つの要素だけで決まるのではなく、複数の手触りや記憶や使われ方の重なりによって成り立つ。

問三

本文における「保存」と「更新」の関係について、最も適切なものを一つ選べ。

ア 保存は過去を守る営みであり、更新は未来へ向かう営みであるため、両者は基本的に相反する。

イ 保存と更新は対立して見えるが、保存のために改修が必要になることもあり、更新の中で古いものが使われ続けることもある。

ウ 保存が十分に行われれば更新は不要になり、更新が進めば保存の意味は薄れていく。

エ 保存と更新の違いは、建物の外観を残すか用途を変えるかという点に限られている。

問四

本文において、「形だけが残ることで、かえって生活が失われたことが目立つ」とされるのはなぜか。説明せよ。(160字前後)

問五

本文の立場に立ち、「街らしさ」を守ることが、単に古いものをそのまま残すことではない理由を説明せよ。(180字前後)

【核心をことばにする】

次の一節を読み、①～④に答えなさい。

対象文

保存と更新は、対立する言葉のように見える。だが実際には、両者はしばしば絡み合っている。保存のために改修が必要になることがあり、更新の中でこそ古いものが使われ続けることもある。

① 事実

本文では何が述べられているか。

② ここから言えそうなこと

③ 言いすぎになりそうなこと

④ つまりどういうことだとと言えるか

解答・解説

【全体総括】

本章は、古い街並みの保存と更新をめぐり、「残すこと」と「変えること」の関係を問い直す評論である。筆者はまず、街並みの保存が、単に古い建物を維持することではなく、人々が自分の場所を失わないための試みとして語られることを示す。しかし本文は、保存を単純に肯定しない。外観だけが残っても、そこにあった商いや生活が失われていれば、むしろ生活の不在が目立つことがある。一方で、古い建物を新しい用途に合わせて使い続ける更新は、過去を消すのではなく、現在の生活へ接続し直す営みになりうる。

したがって、街を守るとは、過去の形を凍結することでも、未来のためにすべてを取り払うことでもない。何を残し、何を変えれば、その場所の時間が途切れずに続くのかを考えることである。

読解の核心は、

- ・ 保存Ⅱ形の維持、更新Ⅱ破壊、という単純な対立を避けること
- ・ 街らしさが、建物・道・記憶・使われ方・生活の重なりで成り立つこと
- ・ 残すために変える必要がある場合を理解すること
- ・ 街を守るとは、その場所がなお生きて使われる道を探すことだと捉えることにある。

問一

正答…ウ

アは誤り。本文は、街を保存することを「過去の形をそのまま未来へ運ぶこと」とは考えていない。むしろ、街は生活の場であり、変化せざるをえないと述べている。イも不適切。更新は破壊だけを意味せず、古い建物を現在の生活へ接続し直すことにもなりうる。

エは一部近いが、街らしさを住民の記憶だけに寄せすぎている。本文は、建物や道

の形、素材、音、匂い、使われ方などの重なりを重視している。

したがって、古いか新しいかではなく、何を残し何を変えることで場所が生きて使われ続けるかを問うウが最も適切である。

問二

正答…ウ

アは本文の商店街の例に対応している。外観が残っても、商いや人の営みが失われていけば、形だけが残ることがある。

イも適切。古い建物を新しい用途で使い続けることは、過去を現在に接続し直すものとして描かれている。

エも本文の「街らしさ」についての記述と一致する。

ウだけが不適切である。本文は、観光客に魅力的な街並みが、そこに住む人々にとっては使いにくい舞台装置になってしまう場合があると述べている。

問三

正答…イ

本文は、保存と更新を対立する言葉のように見えるとしつつ、実際には両者が絡み合っていると述べる。保存のために改修が必要になることがあり、更新の中で古いものが使われ続けることもある。したがってイが最も適切である。

アは、保存と更新を基本的に相反するものとして読んでおり、本文の結論に反する。ウも誤り。保存が十分なら更新が不要、更新が進めば保存が薄れる、という関係ではない。

エは狭すぎる。本文の保存と更新は、外観と用途だけでなく、生活・記憶・街らしさ・使われ方の問題に関わっている。

問四

本文において、「形だけが残ること、かえって生活が失われたことが目立つ」とされるのはなぜか。説明せよ。

模範解答

「形だけが残る」とは、古い看板や店構えが保存されても、そこにあった商いや人の営みが失われている状態を指す。外観は記憶を呼び起こすが、店主や客の往来が消えていけば、かえって生活の不在が際立つ。本文は、街の保存には形だけでなく、使われ続ける時間や営みも必要だと示している。つまり形の保存は、生活の継続を保証しないのである。

別解例①

古い外観が保たれても、店として使われず、人の出入りや商いが途絶えていけば、その場所にあった生活は戻らない。むしろ形が残ること、以前はそこにあった営みとの差が見えやすくなる。本文は、保存を見た目の維持に限ると、生活の痕跡ではなく生活の喪失を強く示してしまう場合があると述べている。形だけでは街は生きて残らないのである。

別解例②

看板や店構えは残っていても、そこに人が通い、物を買ひ、店主と客が関わる時間が失われていけば、街の一部としての働きは薄れている。形は過去を思い出させるが、同時に、もうそこに生活が続いていないことも見せてしまう。そのため本文では、外観だけの保存が生活の不在を目立たせることがあるとされる。形だけでは街は生きて残らないのだ。

■自己採点チェック

- ・ 「形」と「生活・商い・人の営み」を区別できているか
- ・ 外観が記憶を呼び起こす一方で、不在も目立たせる点を書けているか
- ・ 保存を外観維持だけにしていないか

問五

本文の立場に立ち、「街らしさ」を守ることが、単に古いものをそのまま残すことではない理由を説明せよ。

模範解答

本文では、街らしさは建物の年代や外観だけでなく、道の細さ、素材の手触り、人の通り方、店と客との距離、季節の匂いなど、多くの要素の重なりから成るとされる。古い形をそのまま残しても、生活や使われ方が途絶えれば、街は空洞化しうる。だから街らしさを守るには、何を残し何を変えれば、その場所がなお生きて使われるかを考える必要がある。保存とは凍結ではなく、時間をつなぐ工夫なのである。

別解例①

街らしさは、古い建物があるだけで保たれるものではなく、そこで人が住み、働き、通り、関わる時間の重なりによって成り立つ。外観を凍結しても、商いや生活が失われれば、形だけの保存になりかねない。本文は、残すことと変えることを対立させず、改修や新しい用途を通じてその場所の時間を途切れさせないことが、街を守ることだと述べている。変化を含めて残す発想が必要なのである。

別解例②

本文は、街を博物館の展示物のようにそのまま残すことを保存の本質とは見ていない。街は生活の場であり、屋根や配管、用途や人の流れは変わらざるをえないからである。重要なのは、古い形を固定することではなく、建物の質感や道の記憶を受け継ぎながら、新しい使われ方の中でその場所らしさを生かし続けることである。守るとは、変えずに置くことだけではない。

■自己採点チェック

- ・ 街らしさを一つの要素に還元していないか
- ・ 「形を残す」だけでは生活が続くとは限らない点を書けているか
- ・ 変化や更新が保存に含まれうることに触れているか

【核心をことばにする 記入例】

対象文

保存と更新は、対立する言葉のように見える。だが実際には、両者はしばしば絡み合っている。保存のために改修が必要になることがあり、更新の中でこそ古いものが使われ続けることもある。

① 事実

保存と更新は対立しているように見えるが、実際には互いに関わり合っていると述べている。

保存のために改修が必要な場合や、更新によって古いものが使われ続ける場合があるとされている。

② ここから言えそうなこと

古いものを守るには、ただそのまま残すだけでなく、変えることが必要になる場合もある。

また、新しく使い直すことが、かえって古いものを生かすことにもなりうる。

③ 言いすぎになりそうなこと

- ・ 保存と更新は本来対立するものではなく、むしろ同じ目的へ向かう二つの手段だと言える。

- ・ 古いものを本当に残すためには、外観を守るよりも、現在の用途に合わせて変えることのほうが重要になる。

- ・ 更新の中で古いものが使われ続けるなら、形をそのまま保つ保存にはあまりこだわる必要がない。

- ・ 保存とは、過去を固定することではなく、時代に合わせて変化させ続けることだと言い切れる。

- ・ 街を守るうえでは、残すか変えるかという対立よりも、使われ続けるかどうかだけを基準にすべきである。

④ つまりどういうことだと言えるか

保存と更新は、単純に反対のものではない。

古いものを残すために変えることが必要な場合もあり、変えることによって古いものが生き続ける場合もある。

【第六問】 約束の場所

駅の東口には、昔から小さな時計台があった。時計台と言っても、観光地にあるような立派なものではない。ロータリーの端に立つ、細い柱の上に丸い時計が載っているだけの、ごくありふれた待ち合わせ場所である。雨の日には庇が足りず、夏には日陰にもならない。それでも駅前で人と会うとき、多くの人が「時計のところで」と言った。時計台は、正確な時刻を知らせるためというより、人が互いを見つめるために立っているようなものだった。

美佳は、その時計台のそばで、浅野を待っていた。待ち合わせの時刻は午後三時で、スマートフォンの画面は三時十二分を示している。遅刻としては大した時間ではない。浅野は昔から、五分や十分の遅れをあまり重く考えない人だった。美佳はそのことを覚えている。覚えている、というより、覚えていると思っている。浅野が本当にそういう人だったのか、あるいは何度か遅れたことを、自分がいつのまにか「そういう人」としてまとめてしまったのかは分からない。

約束をしたのは、たぶん先月の終わりだった。二人は商店街の喫茶店で偶然会い、近況を話した。学生時代にはよく会っていたが、社会人になってからは年に一度会うかどうかになっていた。喫茶店を出るとき、浅野が「また駅前の時計のところでも」と言った。美佳は「じゃあ来月の土曜に」と返した。そのあと、何日だったか、時間は何時だったか。美佳の記憶では、今日の三時である。だが、記憶というものは、自分に都合よく空白を埋めることがある。

メッセージの履歴を見返せばよい、と美佳は思った。しかし、二人はその約束をメッセージで確認していなかった。昔からそういうところがあった。会話の流れで約束し、あとから「そういえば」と言って集まる。学生時代にはそれで十分だった。互いの時間をもっと広く、予定の輪郭も今ほど細かくなかったからだろう。今となつては、その曖昧さが少し危うい。

三時十五分。美佳は時計台の文字盤を見上げた。駅前の時計は、スマートフォン

より二分遅れていた。昔もそうだった気がする。浅野が、この時計はいつも少し遅れている、と笑ったことがあるような気がした。しかし、それも本当に浅野だったかどうかは定かではない。別の誰かだったかもしれない。あるいは、誰かが言ったのではなく、美佳自身が何度も見ているうちに、そういう言葉があったような気になっているだけかもしれない。

通行人が何度も時計台の前を横切る。高校生の二人組が、片方のイヤホンに分け合いながら通り過ぎた。ベビーカーを押す若い夫婦が、改札へ向かった。年配の男性が、駅前の案内図を見てから、すぐに見るのをやめた。美佳は、それぞれの人にとってここが何の場所でもないのだろうと思った。自分には少し特別に感じられる場所が、ほとんどの人にはただ通り過ぎる場所である。そのことは当たり前なのに、今日はなぜか少し寂しく感じられた。

三時二十分を過ぎたところで、浅野からメッセージが届いた。

「ごめん、今日って何か約束してた？」

美佳はその文をしばらく見た。怒りよりも先に、胸の中がすうっと冷えるような感じがあった。約束を忘れられたのだ、と思った。すぐにそう思ったが、同時に、本当に忘れたのは浅野なのか、という疑いも浮かんた。今日が約束の日だったという証拠はどこにもない。証拠という言葉は大げさだが、少なくとも確認できる記録はない。

返信欄を開き、美佳は「今日三時に時計台で」と打った。そこまで打ってから、消した。責めているように見える気がしたからである。実際、責めたい気持ちが少ないしなかったわけではない。だが、もし自分の記憶違いだったらどうするのか。いや、記憶違いでなかったとしても、責めるように言ってしまうえば、それはそれでこの約束の形を変えてしまうように思えた。

「ううん、私が勘違いしたかも」

結局そう送った。

送ってから、美佳は少し後悔した。勘違いしたかも、という言い方は、相手を責

めない代わりに、自分の記憶を自分で弱めてしまう。だが、その時点ではほかの言葉が見つからなかった。

浅野からすぐに返事が来た。

「え、そうだった？ごめん。もしかして駅？」

この「もしかして」という語が、美佳には少しだけ救いに見えた。浅野の側にも、約束の気配がまったくないわけではないのかもしれない。あるいは、美佳の返信を読んで気を遣っただけかもしれない。その差は大きいようでいて、今の美佳には確かめる方法がなかった。

「うん。でも大丈夫。買い物ついだから」

買い物の予定はなかった。駅ビルで何かを見れば、買い物ついだったことのできる。そう考えた自分を、美佳は少し嫌だと思った。だが、何も買わずに帰れば、わざわざ待ちに来たことがそのまま残ってしまう。駅ビルへ入って、小さな菓子でも買えば、今日の外出には別の名目ができる。

浅野からの返信は少し遅れた。

「ほんとごめん。今から行こうか？」

美佳は時計台の下で、数秒だけ立ち止まった。今から来ると言われれば、待てないことはない。浅野の家からここまでなら、四十分ほどだろう。待っていれば会える。会えば、約束があったかどうかの話もできるかもしれない。あるいは、その話を避けたまま、お茶でも飲んで帰ることもできる。

だが、そのどちらも少し違う気がした。今から来てもらえば、浅野は遅れて来る人になる。自分は待っていた人になる。その形ができてしまう。約束が本当にあったかどうか分からないまま、その形だけが先に固まるのは、どこか不自然だった。

「今日はいいよ。また今度」

美佳はそう送った。今度、という言葉が急に頼りなく見えた。いつなのか、どんなのか、何を約束しているのか、何も決めていない。それでも「また今度」としか言えなかった。

駅ビルに入り、地下の食品売り場を一周した。何かを買うつもりだったが、どの店の前でも足が止まらなかった。結局、何も買わずに外へ出た。雨が降り出していた。天気予報では夕方から雨と言っていた気がする。傘は持っていなかった。

時計台の前に戻る必要はなかった。けれど、東口へ出るにはその前を通るのが早い。美佳はもう一度、時計台のそばを通った。さっきまで自分が立っていた場所には、若い男が一人立っていた。誰かを待っているらしく、スマートフォンを見ては顔を上げている。美佳は、その人を見て、自分もさっきはあんなふうに見えていたのだろうかと思った。待っている人は、遠くから見ると案外分かりやすい。何もしていないのに、その場から離れないことで、何かに結びつけられているのが見える。

帰りの電車の中で、浅野からまたメッセージが来た。

「今度ちゃんと決めよう。時計のところで」

美佳は、画面を見たまま少し笑った。浅野は覚えていたのだろうか。忘れていたのだろうか。それとも、今このやり取りの中で、時計台を二人の待ち合わせ場所としてもう一度作り直したのだろうか。

返事を打つまでに、電車は二駅進んだ。美佳は結局、

「うん、ちゃんと決めよう」

と送った。

「時計のところで」とは書かなかった。書かなくてもよい気がしたし、書くとか何を確かめすぎる気もしたからである。

窓の外で、雨に濡れたホームの灯りが流れていった。美佳は、今日の約束が本当にあったのかどうか、まだ分からなかった。分からないままでも、何かは少し残った。あるいは、残ったのではなく、いま作られたのかもしれない。

設問

問一

本文の理解として最も適切なものを一つ選べ。

ア 美佳は、浅野が約束を完全に忘れていたことを確信しながらも、関係を壊さないために自分の勘違いだったことにしている。

イ 美佳は、今日の約束が本当にあったかどうかを確定できないまま、自分の記憶と浅野の反応のあいだで揺れながら、その場を傷つけすぎない言葉を選んでいる。

ウ 美佳は、浅野の曖昧な態度に失望し、時計台という場所に結びついていた記憶を完全に手放そうとしている。

エ 美佳は、浅野との関係が続けるために、自分の記憶よりも浅野の発言を常に優先するようにになっている。

問二

本文における「時計台」の役割として最も適切なものを一つ選べ。

ア 時計台は、二人の約束が実際に存在したことを客観的に証明するための場所として描かれている。

イ 時計台は、誰にとっても同じ意味を持つ公共の場所であり、美佳の個人的な記憶とは切り離されている。

ウ 時計台は、待ち合わせの目印であると同時に、美佳にとって過去の記憶や浅野との関係の気配が集まる場所として描かれている。

エ 時計台は、浅野が忘れていた約束を思い出すきっかけとしてのみ機能している。

問三

美佳が「ううん、私が勘違いしたかも」と送ったのはなぜか。本文に即して説明せよ。(130字前後)

問四

本文終盤の「残ったのではなく、いま作られたのかもしれない」とはどういうことか。説明せよ。(180字前後)

【核心をことばにする】

次の一節を読み、①～④に答えなさい。

対象文

約束が本当にあったかどうか分からないまま、その形だけが先に固まるのは、どこか不自然だった。

① 事実

本文では何が述べられているか。

② ここから言えそうなこと

③ 言いすぎになりそうなこと

④ つまりどういことだと言えるか

解答・解説

【全体総括】

本章は、駅前の時計台を舞台に、美佳と浅野のあいだで交わされたはずの約束が、本当に存在したのかどうか分からないまま進む物語である。美佳は「今日三時に時計台で」と記憶しているが、それを確認するメッセージなどの記録はない。そのため、浅野が忘れたのか、美佳が思い違いをしたのかは、本文中で最後まで確定されない。

重要なのは、約束の事実関係そのものよりも、美佳がその不確かさをどう扱うかである。美佳は浅野を責めたい気持ちを持ちながらも、「私が勘違いしたかも」と言うことで、相手を追い詰めず、同時に自分の記憶も弱めてしまう。その言葉には、関係を傷つけないための配慮と、自分の記憶を確定できない不安が重なっている。終盤では、浅野の「今度ちゃんと決めよう。時計のところで」という言葉によって、時計台がもう一度二人の待ち合わせ場所として立ち上がる。約束は、過去に確かにあったものとして「残った」のか、それともこのやり取りの中で新たに「作られた」のか分からない。そこに、本章の読解の難しさと面白さがある。

読解のポイントは、

- ・ 約束の有無を本文が確定していないこと
- ・ 美佳が記憶と配慮のあいだで言葉を選んでいること
- ・ 時計台が公共の場所でありながら、二人の関係の気配を帯びていること
- ・ 記憶や約束が、事実であるだけでなく、関係の中で作り直されうることにある。

問一

正答…イ

アは言いすぎである。美佳は浅野が完全に忘れていたと確信しているわけではない。むしろ、自分の記憶違いかもしれないという疑いも抱いている。

ウも不適切で、美佳は時計台の記憶を完全に手放そうとしているわけではない。終盤でも「時計のところで」という言葉は残り続けている。

エも強すぎる。美佳は浅野の発言を常に優先するようになったのではなく、その場で関係を傷つけすぎない言葉を選んでいる。

したがって、約束の有無を確定できないまま、自分の記憶と浅野の反応のあいだで揺れているとするイが最も適切である。

問二

正答…ウ

アは誤り。時計台は、約束の存在を客観的に証明する場所ではない。そこに美佳が立っていたことは事実だが、それだけで約束があったとは証明されない。

イも不適切。時計台は公共の場所でありながら、美佳にとっては浅野との記憶や待ち合わせの気配が集まる場所として描かれている。

エも限定しすぎである。時計台は浅野が約束を思い出すための装置ではない。したがって、時計台を、待ち合わせの目印であると同時に、美佳の記憶や関係の気配を帯びる場所とするウが最も適切である。

問三

美佳が「ううん、私が勘違いしたかも」と送ったのはなぜか。本文に即して説明せよ。(130字前後)

模範解答

美佳は、自分の記憶では今日三時に約束したと思っているが、確認できる記録がなく、自分の勘違いである可能性も否定できない。浅野を責める形で言えば、自分が誤っていた場合だけでなく、正しかった場合にも約束の形を傷つけると感じたため、相手を追い詰めないより慎重な言葉を選んだのである。

別解例①

美佳には約束を忘れられたという思いがある一方で、約束を確認する記録もなく、自分の記憶違いかもしれないという疑いも残っている。そこで「今日三時に時計台で」と断定すれば、相手を責めるだけでなく、自分の記憶を事実として押し出すことになるため、場を壊しにくい言い方を選んだのである。

別解例②

美佳は浅野を責めたい気持ちを持ちながらも、約束が本当に今日だったと確かめる手段を持っていない。そのため、相手が忘れたと決めつければ、自分の記憶違いだった場合に行きすぎになるし、そうでなくても二人の関係に角を立ててしまう。そこで、責任の所在をばかす言葉を選んだと読めるのである。

■自己採点チェック

- ・ 美佳が「忘れられた」と感じている点に触れているか
- ・ しかし記録がなく、自分の記憶違いの可能性もある点を書けているか
- ・ 相手を責めすぎない言葉を選んだことを説明できているか

問四

本文終盤の「残ったのではなく、いま作られたのかもしれない」とはどういうことか。説明せよ。(180字前後)

模範解答

この一文は、今日の約束が過去から続いていたものなのか、それとも当日のやり取りを通じて新たに形を得たものなのか、美佳自身にも確定できないことを示す。浅野の「時計のところで」という言葉によって、約束が記憶として確認されたのではなく、二人の間で改めて共有され直したとも読める。約束は事実であるだけでなく、関係の中で作られ直すものと描かれている。

別解例①

美佳は、今日の待ち合わせが本当に以前から約束されていたのかを最後まで確かめられない。しかし浅野とのやり取りの結果、「時計のところで」という言葉は、過去の

記憶であると同時に、これからの約束の形にもなっていく。したがって、何かが残ったというより、曖昧な記憶がその場の応答によって新しく関係の中であらためて意味を持ち始めた可能性を示している。

別解例②

この表現は、時計台で会うという約束が、以前から確かなものとして残っていたとは言いつけないことを示している。一方で、浅野の返信と美佳の応答によって、時計台は再び二人の待ち合わせ場所として立ち上がる。つまり、約束は過去の事実として発見されたのではなく、曖昧な記憶を含んだまま、二人のやり取りの中であらためて作り直されたとも読める。

■自己採点チェック

- ・ 約束が過去の事実として確定されていない点に触れているか
- ・ 浅野の「時計のところで」によって、約束が再び形を持つ点を書けているか
- ・ 「残る」と「作られる」の違いを、関係の中で説明できているか

【核心をことばにする 記入例】

対象文

約束が本当にあったかどうか分からないまま、その形だけが先に固まるのは、どこか不自然だった。

① 事実

約束が実際にあったかどうかは確かめられていない。

そのまま浅野に来てもらえば、「浅野が遅れて来る人」「美佳が待っていた人」という形だけが先にできてしまうと、美佳は感じている。

② ここから言えそうなこと

美佳は、事実が曖昧なまま役割や関係の形だけが決まってしまうことに違和感を覚えている。約束の有無を確かめる前に、自分と浅野の立場が固定されることを避けようとしていると言える。

③ 言いすぎになりそうなこと

- ・ 美佳は、浅野を「遅れて来る人」にしてしまうことで、二人の関係が決定的に変わるのを恐れている。
- ・ 美佳にとって問題なのは、約束があったかどうかよりも、自分が「待たされた側」になることだったと言える。
- ・ 美佳は、浅野に来てもらえば自分の記憶の正しさが曖昧なまま既成事実化されると考え、それを避けたかったのだろう。
- ・ この場面から、美佳は事実そのものよりも、二人の関係がどのような物語として形づくられるかを重く見ていると分かる。
- ・ 美佳は、浅野が来ることで約束の有無がどうでもよくなり、結果だけが関係を支配してしまうことを直感している。

④ つまりどういうことだと言えるか

美佳は、約束が本当にあったか分からないまま、浅野が遅れて来る人、自分が待っていた人という形だけができてしまうことに違和感を覚えた。だから、その場で会うことを避けたのだと言える。

【第七問】 うまい説明と正しい説明

何かを説明するとき、私たちはしばしば「分かりやすさ」を求める。複雑な仕組みを簡単な図で示す。難しい概念を身近なたとえで語る。長い過程を一つの流れにまとめる。説明が分かりやすければ、聞き手は迷いにくくなり、自分が何を理解すればよいのかをつかみやすくなる。分かりやすい説明には、人を入り口へ導く力がある。

しかし、「うまい説明」と「正しい説明」は同じではない。うまい説明とは、聞き手の経験や感覚に合う形で、対象を捉えやすくする説明である。これに対して、正しい説明とは、対象の仕組みや条件をできるだけ歪めずに示す説明である。もちろん、両者は対立するとは限らない。よい説明は、分かりやすく、かつ正しいことを目指すべきだろう。だが実際には、分かりやすくするために省いたものが、正しさにとって重要である場合がある。

たとえば、人体の血液循環を「ポンプと管」にたとえることがある。心臓がポンプのように血液を送り出し、血管が管のように全身へ運ぶという説明は、初めて学ぶ人には分かりやすい。だが、このたとえだけで理解を終えると、心臓や血管を単なる機械装置のように考えてしまう。実際の身体では、血管の収縮や神経、ホルモン、細胞の働きなど、多くの条件が絡み合っている。たとえば入口として有効だが、入口であることを忘れると、理解を狭める。

同じことは、社会や人間関係の説明にも言える。「学校は小さな社会である」「市場は見えざる手で動く」「心は器のようなものだ」といった言い方は、それぞれ一定の場面で理解を助ける。だが、たとえば話は似ている部分を強く照らす一方で、似ていない部分を影に置く。説明がうまいほど、聞き手はその影を見落としやすい。言葉が腑に落ちたとき、人はしばしば、何が省略されたのかを確かめることを忘れる。

分かりやすい説明には、対象を一つの筋道へ整える働きがある。原因があり、結果があり、途中にいくつかの段階がある。そう示されると、ものごとはすっきり見

える。だが現実の出来事は、必ずしも一つの筋道で進むわけではない。複数の原因が絡み、偶然が入り込み、ある時点では小さく見えた条件があとから大きく効いてくることもある。説明が筋道を整えすぎると、複雑さそのものが、まるで理解の邪魔であるかのように扱われてしまう。

とはいえ、複雑さをすべて残した説明は、説明として機能しにくい。もしある出来事について、関係する条件をすべて並べるだけなら、聞き手はかえって何を理解すればよいのか分からなくなる。説明には必ず選択がある。何を前に出し、何を後ろへ置くのか。どこまでを一つの原因として扱い、どこかを補足とするのか。説明とは、対象をそのまま写すことではなく、聞き手がたどれる形へ組み直すことである。

したがって問題は、説明が単純化すること自体にあるのではない。問題は、その単純化がどのような目的で行われ、何を見えにくくしているのかを説明する側も聞く側も忘れてしまうことにある。単純化は、理解への入口を作るためには必要である。だが、入口を建物全体と取り違えれば、そこから先へ進む必要が見えなくなる。

正しい説明とは、ただ細かく複雑な説明のことではない。むしろ、何を省略しているかを自覚し、その省略がどこまで許されるのかを示せる説明である。必要な場面では単純に言い、必要な段階になれば複雑さを戻す。たとえば話を使うなら、そのたとえがどこまで届き、どこから外れるのかを示す。正しさとは、情報量の多さではなく、説明の届く範囲を見誤らないことにある。

聞き手の側にもまた、分かりやすさへの注意が求められる。分かった、という感覚は大切である。その感覚がなければ、学びは進みにくい。しかし、分かったという感覚は、理解の証拠であると同時に、理解を止める誘惑にもなる。よい聞き手は、分かりやすい説明を歓迎しながらも、その分かりやすさが何を削って成り立っているのかを少しだけ疑う。疑うとは、説明を拒むことではない。説明を、次の問いへ開いておくことである。

説明がうまい人は、聞き手の前に道を作る。説明が正しい人は、その道がどこへ

届き、どこから先は別の道が要るのかを知っている。

そして本当によい説明は、分かりやすさによって人を安心させながら、その安心の先に、なお考える余地を残している。

設問

問一

本文の主張を最も精確に再構成しているものを一つ選べ。

ア うまい説明は聞き手に理解した感覚を与えるが、その分だけ対象を単純化するため、正しい説明を目指すなら分かりやすさはできるだけ避けるべきである。

イ うまい説明と正しい説明は一致するとは限らず、よい説明には、分かりやすくするための省略を自覚し、その届く範囲を示すことが求められる。

ウ 正しい説明とは、対象に関係する条件をできるだけ多く残し、たとえば話や単純化を用いずに複雑さをそのまま示す説明である。

エ 分かりやすい説明は、聞き手の感覚に合う形で対象を整理するため、聞き手が納得できるなら正しい説明とみなしてよい。

問二

本文の立場からみて、最も適切でないものを一つ選べ。

ア たとえば話は、対象を理解する入口として有効であるが、それがどこまで届くのかを忘れると理解を狭めることがある。

イ 説明には、何を前に出し、何を後ろへ置くかという選択が含まれるため、対象をそのまま写すものではない。

ウ 説明を正しくするには、複雑さをできるだけ削らず、関係する条件をすべて並べることが最も重要である。

エ 分かったという感覚は学びを進める助けになる一方で、そこで問いを止めてしまう危険も持つ。

問三

本文における「たとえば話」の働きについて、最も適切なものを一つ選べ。

ア たとえば話は、対象の本質を日常的な経験に置き換えることで、複雑さを不要に

する働きを持つ。

イ たとえ話は、似ている部分を照らして理解を助けるが、似ていない部分を見えにくくするため、届く範囲を意識して使う必要がある。

ウ たとえ話は、聞き手に分かった感覚を与えやすいため、正確な説明に先立つ補助としてだけ用いられるべきである。

エ たとえ話は、対象を歪める危険があるため、初学者向けの説明では有効でも、深い理解においては避けるべきである。

問四

本文において、分かりやすい説明がかえって理解を狭めることがあるのはなぜか。説明せよ。(140字前後)

問五

本文の立場に立ち、「正しい説明」とはどのような説明か。うまい説明との違いに触れながら説明せよ。(200字前後)

【核心をことばにする】

次の一節を読み、①～④に答えなさい。

対象文

単純化は、理解への入口を作るためには必要である。だが、入口を建物全体と取り違えれば、そこから先へ進む必要が見えなくなる。

① 事実

本文では何が述べられているか。

② ここから言えそうなこと

③ 言いすぎになりそうなこと

④ つまりどういうことだと言えるか

解答・解説

【全体総括】

本章は、「うまい説明」と「正しい説明」の違いを論じる評論である。筆者はまず、分かりやすい説明が聞き手を理解の入口へ導く力を持つことを認める。たとえば話や図式化、単純化は、複雑な対象を扱いやすくし、学びの出発点を作る。

しかし、うまい説明と正しい説明は同じではない。分かりやすくするためには、必ず何かを省略し、対象を聞き手がたどりやすい形へ組み直す必要がある。その省略が、正しさにとって重要な条件を隠してしまうことがある。たとえば話は似ている部分を照らす一方で、似ていない部分を影に置くのである。

本文が求める「正しい説明」とは、単に詳しく複雑な説明ではない。必要な場面では単純化しつつ、その単純化が何を省き、どこまで届くのかを自覚している説明である。よい説明とは、分かりやすさによって安心を与えながらも、その先にさらに考える余地を残すものである。

読解の核心は、

- ・ 分かりやすさは必要だが、それ自体が正しさではないこと
- ・ たとえ話や単純化には、照らす面と隠す面があること
- ・ 正しい説明とは、情報量の多さではなく、届く範囲への自覚を持つ説明であること

・ 「分かった」という感覚が、学びの入口にも停止点にもなりうることを捉えられるかどうかにある。

問一

正答…イ

アは誤り。本文は分かりやすさを避けるべきだとは言っていない。むしろ、理解への入口として必要だと認めている。

ウも不適切。正しい説明は、条件をすべて並べる説明ではない。

エも誤り。聞き手が納得できることと、説明が正しいことは同じではない。

したがって、うまい説明と正しい説明は一致するとは限らず、省略とその届く範囲への自覚が必要だとするイが最も適切である。

問二

正答…ウ

アは本文のたとえ話についての説明に合う。

イも、説明には選択があるという本文の内容に一致する。

エも適切で、「分かった」という感覚の両義性を捉えている。

ウだけが不適切である。本文は、関係する条件をすべて並べることを正しい説明とはしていない。むしろ、すべてを並べるだけでは説明として機能しにくいと述べている。

問三

正答…イ

本文におけるたとえ話は、対象の似ている部分を照らし、聞き手に理解の入口を作る働きを持つ。しかし、それは同時に、似ていない部分を影に置く。そのため、たとえがどこまで届き、どこから外れるのかを意識する必要がある。

アは、複雑さを不要にするとしており行きすぎ。

ウは「補助としてだけ」と限定しすぎ。

エは深い理解では避けるべきとしており、本文の立場と異なる。

よってイが最も適切である。

問四

本文において、分かりやすい説明がかえって理解を狭めることがあるのはなぜか。説明せよ。(140字前後)

模範解答

分かりやすい説明は、対象を身近なたとえば一つの筋道に整えることで入口を作る。しかしその過程で、省かれた条件や似ていない部分が見えにくくなる。聞き手が腑に落ちた感覚だけで理解を終えると、説明が照らした部分を全体と取り違い、かえって理解が狭まるのである。

別解例①

分かりやすい説明は、複雑な対象から要点を選び、聞き手がたどりやすい形に組み直す。そのため学びの入口にはなるが、何が省略されたかを忘れると、たとえば届かない部分や複数の条件が消えてしまう。分かったという安心が、さらに問う必要を見えにくくするからである。

別解例②

分かりやすさは、対象の一部を強く照らし、聞き手に理解の手がかりを与える。しかし同時に、照らされなかった部分を影に置く。説明のうまさによって納得が早く生じるほど、省略や単純化に気づきにくくなり、本来残るはずの複雑さを見落とししてしまうという危うさがある。

■自己採点チェック

- ・ 分かりやすさが「入口」になる点に触れているか
- ・ 省略や単純化によって見えにくくなるものを書けているか
- ・ 「分かった感覚」が理解を止める危険まで説明できているか

問五

本文の立場に立ち、「正しい説明」とはどのような説明か。うまい説明との違いに触れながら説明せよ。(200字前後)

模範解答

本文における正しい説明とは、対象を細かく並べることではなく、聞き手がたどれるように単純化しつつ、その単純化が何を省き、どこまで有効なのかを示せる説明

である。うまい説明は聞き手の経験に合う形で理解の入口を作るが、それだけでは対象を歪めることがある。正しい説明は、その入口を用いながら、必要に応じて複雑さを戻し、説明の届く範囲を見誤らせない。この点で両者は異なる。

別解例①

うまい説明は、たとえや図式によって対象を分かりやすくし、聞き手を理解の入口へ導く。しかし、分かりやすさのために省いた条件が重要であれば、そこで理解は狭くなる。本文のいう正しい説明とは、単に分かりやすい説明でも、すべてを細かく並べる説明でもない。何を前に出し何を後ろに置いたかを自覚し、その説明が届く範囲を示せるものである。そこに、両者を分ける大事な違いがある。

別解例②

正しい説明は、情報を多く詰め込んだ説明ではなく、対象を理解しやすい形に組み直しながら、省略したものやたとえの限界を見失わせない説明である。これに対し、うまい説明は、聞き手に腑に落ちる感覚を与えやすいが、その感覚が理解の完了を装うこともある。本文は、分かりやすさを保ちつつ、なお次の問いへ開かれた説明を正しさに近いものとしている。この点こそ両者の重要な差である。

■自己採点チェック

- ・ 「うまい説明」を、聞き手に分かりやすくする説明として捉えられているか
- ・ 「正しい説明」を、説明の届く範囲や省略への自覚と結びつけているか
- ・ 正しさを「詳しさ」や「複雑さそのもの」と取り違えていないか

【核心をことばにする 記入例】

対象文

単純化は、理解への入口を作るためには必要である。だが、入口を建物全体と取り違えれば、そこから先へ進む必要が見えなくなる。

① 事実

単純化は、理解を始めるためには必要だと述べている。

しかし、その単純化された説明を対象全体の理解だと思ってしまうと、さらに考える必要が見えなくなるとも述べている。

② ここから言えそうなこと

分かりやすくすることは学びの出発点として大切だが、それだけで全部分かったと思うと、説明が省いた部分や次に考えるべきことを見失いやすいと言える。

③ 言いすぎになりそうなこと

- ・ 単純化された説明は、最初の理解には役立つが、深い理解へ進む段階ではむしろ邪魔になりやすい。
- ・ 分かりやすい説明に納得した時点で、人はその先を考える意欲をかなり失いやすい。
- ・ 説明を単純化する以上、その説明は対象の一部を切り捨てているため、正しさには必ず限界がある。
- ・ 学ぶ側は、分かりやすい説明を受け取ったあと、必ずそれを疑い直す段階へ進まなければならない。
- ・ 入口としての説明にとどまる人は、対象の全体を見たつもりになり、かえって理解から遠ざかることがある。

④ つまりどういうことだと言えるか

単純化は、複雑なものを理解し始めるために必要である。

しかし、それを全体の理解だと思ってしまうと、まだ考えるべき部分や、説明が省いたものに目が向かなくなる。

【第八問】 残るものと消えるもの

何かが失われるとき、人はしばしば、それを残そうとする。写真を撮り、日記を書く。録音し、資料を整理し、誰かに話しておく。子どもの声、祖父母の口癖、昔の料理の手順、すでに閉じた店の看板、何度も通った道の曲がり具合。そうしたものは、目の前から消えようとするとき、初めて「残しておかなければならないもの」として見えてくることがある。

しかし、残すとは何をするものだろうか。写真はその場の光を残すが、その場所にいた人の沈黙や、撮られる直前に言いかけてやめた言葉までは写さない。録音は声を残すが、その声を聞いていた人の表情や、そのとき部屋に流れていた気まぐさまでは録れない。レシピは材料と手順を残すが、火を弱めるタイミングを教えた手の動きや、「このくらいでよい」と言った声の幅までは書ききれない。何かを残すための方法は、必ず何かを選び、別の何かを落としている。

その意味で、記録とは、消えゆくものに対する抵抗であると同時に、消えるものを選び直す作業でもある。すべてを残すことはできない。だから私たちは、何を残すかを決める。だが、何を残すかを決めるということは、何を残さないかを決めることでもある。しかも多くの場合、残さなかったものの方が、あとから思いがけず重要に感じられる。写真に写った食卓より、そこに写らなかった匂いや箸の音のほうか、その日の記憶を支えていたと気づくことがある。

では、記録されなかったものは、ただ消えたのだろうか。そうとも言い切れない。ある人の話し方は、録音されていなくても、それを聞いて育った人の言葉の間合いに残ることがある。昔の料理は、正確な分量が失われても、誰かが「少し濃いめがうちの味だった」と覚えているかぎり、別のかたちで生き延びることがある。道具の使い方も、手順書ではなく、隣で見ていた人の身体の動きの中に残ることがある。残るものは、必ずしも保存されたものと同じではない。

ここで、残るという言葉には二つの意味がある。一つは、形が保たれることであ

る。紙が残る、建物が残る、録音が残る、映像が残る。もう一つは、働きが続くことである。ある言い方が別の人の言葉遣いの中に移り、ある手つきが別の人の仕事の仕方に入り込み、ある場所で過ごした時間が、その後の判断や好みをひそかに変える。前者は見えやすく、後者は見えにくい。だが、見えやすいものだけが本当に残っているとは限らない。

もちろん、形を軽く見てよいわけではない。形が残るからこそ、思い出せることがある。古い手紙の紙質、写真の端の折れ、楽譜に残った鉛筆の書き込み、木の机についた小さな傷。そうしたものは、言葉だけでは届かない記憶を呼び戻す。形は、過去へ戻るための入口になる。形が何も残っていないければ、働きが続いていたとしても、それがどこから来たものなのかをたどりにくくなる。

だが、形を残すことに安心しすぎると、今度は残ったものを過去そのものだと考えてしまう。手紙はその人のすべてではない。写真はその日のすべてではない。古い道具は、それを使っていた時間のすべてではない。残されたものは、過去の全体ではなく、過去へ向かう手がかりである。手がかりを手がかりとして扱うなら、それは記憶を開く。だが手がかりを過去そのものと取り違えれば、むしろ過去は狭くなる。

受け継ぐということも、ここから考え直すことができる。受け継ぐとは、同じ形をそのまま保存することではない。むしろ、形を保つことと、形を変えることのあいだで、何を次へ渡そうとしているのかを確かめ続けることに近い。ある祭りが同じ日程で続けられていても、そこで人々が何を感じ、何を担っているかが失われていけば、継承は形だけになる。一方で、やり方が少し変わっても、そこで交わされる気遣いや、集まる理由や、時間の受け止め方が続いていけば、何かは確かに受け継がれているのかもしれない。

ただし、「形よりも心が大切だ」と言えば済むわけでもない。心や精神という言葉は、便利である分だけ、何を残すのかを曖昧にしやすい。形を軽んじて、ただ「思いは残っている」と言うとき、実際には何がどう残っているのかが分からなくなる

こともある。受け継ぐためには、形を守る努力も、形だけでは足りないとする慎重さも、どちらも必要になる。

消えるものにもまた、役割がある。すべてが残ってしまったえば、人は選べなくなる。大量の写真、無数のメッセージ、すべての記録、すべての発言。何も失われないように見える場所では、かえって何を大切にすればよいのかが分かりにくくなる。忘れられること、薄れること、輪郭がぼやけることによって、残ったものの重みが変わる場合もある。消えることは、ただの欠落ではなく、残るものの形を作る働きでもある。

人が思い出を語るとき、その語りは完全な再現ではない。語られるたびに、順序が少し変わり、強調される場面が変わり、語られない部分も変わる。だからといって、それが嘘になるわけではない。むしろ、思い出は、固定された記録というより、その人が現在の場所から過去をもう一度組み直す営みである。語ることによって失われる細部もあるが、語ることによって初めて形を得る意味もある。

このことは、学ぶことにも似ている。誰かから教わった言葉や技術は、教わったときの形のまま残るとは限らない。むしろ、本当に身についたもののほど、もとの形を少し離れ、その人自身の言い方や動きの中に溶け込んでいく。先生の言葉を一字一句覚えておくことだけが、学びの証ではない。忘れてしまった言葉が、自分の考え方の癖や、物を見る角度として残っていることもある。消えたように見えるものが、別の場所で働いているのである。

では、私たちは何を残すべきなのか。おそらく、この問いに一つの答えはない。形を残すべきものもある。記録にするべきものもある。語り継ぐべきものもある。逆に、あえて形を固定せず、使われ方や感じ方の中で変わりながら残るほうがよいものもある。大切なのは、残すという行為を、失われることへの単純な反対として考えないことだろう。残すことの中にも、選択や省略や変化がある。消えることの中にも、別の形で働き続ける可能性がある。

何かが残るとは、過去がそのまま未来に移されることではない。何かが消えると

は、それが完全に無になることでもない。

私たちは、残ったものを手がかりに、消えたものを想像し、消えたものの余白によって、残ったものの意味を測っている。

だから、残すことは、保存することだけではない。消えることは、失敗だけではない。そのあいだで、人は何度も過去を受け取り直し、未来へ渡せる形を探しているのである。

設問

問一

本文の主張を最も精確に再構成しているものを一つ選べ。

ア 何かを残すとは、できるだけ多くの記録や形を保存し、失われるものを少なくすることであり、消えることは基本的に避けるべき欠落である。

イ 残るものには形として保存されるものだけでなく、言葉遣いや手つき、判断の仕方の中で働き続けるものもあり、消えることも残るものの意味を形づくる場合がある。

ウ 形として残されたものは過去そのものではないため、本当に大切なのは記録や物ではなく、人の心や精神を受け継ぐことである。

エ 記録は必ず何かを落としてしまうため、過去を受け継ぐには、形を残すよりも、語り直しや現在の解釈を重視すべきである。

問二

本文の立場からみて、最も適切でないものを一つ選べ。

ア 写真や録音やレシビは何かを残す手段であるが、それらは同時に、写らないもの・録れないもの・書ききれないものを伴っている。

イ 形が残ることで思い出せることもあるため、本文は形として保存されるものの意義を否定していない。

ウ 受け継ぐとは、形をそのまま保つことではなく、形を捨てて心や精神だけを残すことである。

エ 忘れられることや薄れることは、単なる失敗ではなく、残ったものの重みを変え、働きを持つことがある。

問三

本文における「記録」の位置づけとして、最も適切なものを一つ選べ。

ア 記録は、消えゆくものに抵抗するための手段である一方、何を残し何を落とすかを選び直す営みでもある。

イ 記録は、記憶や語りよりも確実に過去を残すための方法であり、受け継ぐうえで最も信頼できる手段である。

ウ 記録は、過去の一部しか残せない以上、むしろ現在の解釈によって自由に補われるべき未完成な素材である。

エ 記録は、形として残るものに人を縛るため、過去を本当に受け継ぐには記録から離れる必要がある。

問四

本文では、「残る」という言葉に二つの意味があるとされている。その二つの意味を整理したうえで、両者の関係を説明せよ。(180字前後)

問五

本文の立場に立ち、「消えること」が単なる欠落ではないとされる理由を説明せよ。(190字前後)

問六

本文全体を踏まえ、「受け継ぐ」とはどのような営みだと考えられるか。形を残すことと変化することの関係に触れながら説明せよ。(230字前後)

【核心をことばにする】

次の一節を読み、①～④に答えなさい。

対象文

何かが残るとは、過去がそのまま未来に移されることではない。何かが消えると

は、それが完全に無になることでもない。私たちは、残ったものを手がかりに、消えたものを想像し、消えたものの余白によって、残ったものの意味を測っている。

① 事実

本文では何が述べられているか。

② ここから言えそうなこと

③ 言いすぎになりそうなこと

④ つまりどういうことだと言えるか

解答・解説

【全体総括】

本章は、「残るもの」と「消えるもの」の関係を、記録・記憶・形・働き・継承という観点から考える総合長文である。

筆者はまず、写真・録音・レシピなどの記録が、失われゆくものを残すための手段である一方、必ず何かを選び、別の何かを落としていることを示す。記録は消えるものへの抵抗であると同時に、何を残し何を残さないかを選び直す営みでもある。

さらに本文は、「残る」という言葉を二つに分ける。一つは、紙・建物・録音・映像のように形が保たれること。もう一つは、話し方・手つき・判断の仕方のように、見えにくい働きが別の人の中で続くことである。形は過去へ戻る手がかりになるが、それ自体が過去の全体ではない。一方、働きは見えにくいが、生活や身体の中で受け継がれる。

また本文は、「消えること」も単なる失敗や欠落とは見ていない。忘れられること、薄れること、記録されないことによって、かえって残ったものの重みや意味が変わることがある。残るものと消えるものは対立するだけでなく、互いに意味を支え合っている。

読解の核心は、

- ・ 残ることを、形の保存だけに限定しないこと
- ・ 消えることを、完全な喪失だけに限定しないこと
- ・ 記録が、残すと同時に落とす営みでもあること
- ・ 受け継ぐとは、形を守ることと変化させることのあいだで、何を次へ渡すのかを確かめ続ける営みであること

を捉えられるかどうかにある。

問一

正答…イ

アは誤りである。本文は、できるだけ多くを記録し、消えることを避けるべきだとは述べていない。むしろ、すべてが残ると、何を大切にすべきか分かりにくくなる場合もあるとしている。

ウは一部近いが、「本当に大切なのは記録や物ではなく、心や精神である」としており、本文を精神論に寄せすぎている。本文は、形が残ることの意義も明確に認めている。

エも不適切である。記録が何かを落とすことは本文の主張に合うが、だからといって形を残すより語り直しや現在の解釈を重視すべきだとは言っていない。したがって、形として残るものと、見えにくい働きとして続くものの両方を捉え、さらに消えることも残るものの意味に関わるとするイが最も適切である。

問二

正答…ウ

アは適切である。本文は、写真・録音・レシピが何かを残す一方で、写らないもの、録れないもの、書ききれないものを伴うと述べている。

イも適切である。本文は、形が残るからこそ思い出せることがあるとして、形の保存を否定していない。

エも適切である。忘れられることや薄れることが、残ったものの重みを変える場合があるという本文の内容と一致する。

ウだけが不適切である。本文は、形を捨てて心や精神だけを残せばよいとは述べていない。むしろ、「心や精神」という言葉は便利なぶん曖昧になりやすく、形を守る努力も必要だとしている。

問三

正答…ア

本文における記録は、消えゆくものに抵抗するための手段である。しかし同時に、

何を残し、何を落とすかを選び直す営みでもある。したがってアが最も適切である。
イは、記録を最も信頼できる手段として強く評価しすぎている。本文は、記録が過去の全体を残すとは考えていない。

ウは、記録を現在の解釈で自由に補うべき素材としており、本文より踏み込みすぎている。

エは、記録から離れる必要があるとしており、本文が認めている記録や形の意義を落としている。

問四

本文では、「残る」という言葉に二つの意味があるとされている。その二つの意味を整理したうえで、両者の関係を説明せよ。

模範解答

本文では、残ることには、紙や建物や録音のように形が保たれる意味と、言葉遣いや手つきや判断の仕方の中で働きが続く意味があるとされる。形は過去を思い出す入口になるが、それだけが本当に残ることではない。一方、働きは見えにくいが、人の身体や考え方の中で受け継がれる。両者は対立せず、形が働きを呼び戻し、働きが形の意味を支える関係にある。

別解例①

本文のいう「残る」には、物や記録として形が残る場合と、誰かの話し方や動き、好みや判断の中で働きが続く場合とがある。前者は見えやすく、過去へ戻る手がかかる。後者は見えにくい、実際の生活や身体の中で続いていく。形だけでは過去全体にならず、働きだけでは来歴をたどりにくいので、両者は互いに補い合い、過去を受け取る力にもなるのだ。

別解例②

本文では、残るとは、手紙や写真のように形が保存されることだけでなく、ある言葉や手つきが別の人のふるまいの中で働き続けることもある。形は記憶を呼び戻

す手がかりとなり、働きは形が失われても別の場所で生きる。したがって、見える保存と見えにくい継承は別物ではあるが、過去を受け取るうえで互いを支え合い、意味を補い合う関係にあるものだ。

■自己採点チェック

- ・ 「形が保たれる」意味と「働きが続く」意味を区別できているか
- ・ 形の保存を否定していないか
- ・ 見えにくい働きの継承にも触れているか
- ・ 両者を対立ではなく、支え合う関係として説明できているか

問五

本文の立場に立ち、「消えること」が単なる欠落ではないとされる理由を説明せよ。

模範解答

本文で消えることが単なる欠落ではないとされるのは、忘れられることや薄れることによって、かえって残ったものの重みや輪郭が変わる場合があるからである。すべてが残れば、人は何を大切にすべきか選びにくくなる。また、記録されなかった声や手つきも、別の人の間合いや動きの中で働き続けることがある。消えることは、残るものの意味を作る働きも持つのである。

別解例①

消えることは、何かが完全に無になることではない。本文では、記録されなかった話し方や料理の感覚が、別の人の言葉遣いや手つきの中に残ることがあるとされる。また、すべてが保存されると、かえって大切なものを選びにくくなる。忘却や薄れは、残ったものの重みを変え、その意味を際立たせることがあるため、単なる欠落とは言えない。

別解例②

本文は、消えることをただの失敗や喪失として見ていない。記録に残らなかったもの、誰かの身体や言葉の中で形を変えて働くことがあるし、忘れられたり薄れた

りすることで、残されたものの意味がかえって定まることもある。すべてを残せばよいのではなく、消えるものの余白があるから、残るものを測れる。だから消失も意味を支えるのである。

■自己採点チェック

- ・消えることを「完全な無」として扱っていないか
- ・忘却や薄れが残るものの意味を変える点に触れているか
- ・記録されなかったものが別の形で働く可能性を書けているか
- ・「すべて残すこと」が必ずよいわけではない点を捉えているか

問六

本文全体を踏まえ、「受け継ぐ」とはどのような営みだと考えられるか。形を残すことと変化することの関係に触れながら説明せよ。

模範解答

本文における受け継ぐとは、過去の形をそのまま保存することでも、形を捨てて心だけを残すことでもない。形は記憶を呼び戻す入口になるが、それだけでは過去全体ではない。一方、形が変わっても、言葉遣いや手つき、集まる理由や時間の受け止め方が続くなら、何かは受け継がれている。つまり受け継ぐとは、形を守る努力と、変化の中で働きを生かす工夫のあいだで、何を次へ渡すのかを確かめ続ける営みである。そこでは、保存と変化のどちらかを選ぶのではなく、両方の緊張を引き受けることが求められる。

別解例①

受け継ぐとは、同じ形を固定して未来へ送ることではなく、その形が支えていた働きや意味を、次の生活の中でどう生かすかを考える営みである。本文は、形が残るから思い出せることを認めつつ、形だけでは継承が空洞化するとも述べる。また、やり方が変わっても、そこにあった気遣いや集まる理由が続くなら、何かは残る。形を保つことと変えることを対立させず、両者の間で渡すべきものを探るのが継承

である。だから形を残すか変えるかではなく、何を働かせ続けるかが問われている。

別解例②

本文での受け継ぐ営みは、過去をそのまま再現することではなく、残す形と変える形を選びながら、何が働き続けるべきかを確かめることだと言える。手紙や道具のような形は過去への入口になるが、それを過去そのものとみなせば狭くなる。逆に形を軽んじて心だけを語れば、何が残ったのかが曖昧になる。だから受け継ぐとは、形を手がかりにしつつ、変化の中で意味や働きを次へ渡すことなのである。保存の努力と変化の必要を、同時に扱う態度が必要になる。

■自己採点チェック

- ・ 受け継ぐことを「同じ形の保存」だけにしていないか
- ・ 形の意義と境界の両方に触れているか
- ・ 変化の中でも働きや意味が続く場合があると書けているか
- ・ 形を残すことと変化することを、単純な対立にしていないか

【核心をことばにする 記入例】

対象文

何かが残るとは、過去がそのまま未来に移されることではない。

何かが消えるとは、それが完全に無になることでもない。

私たちは、残ったものを手がかりに、消えたものを想像し、

消えたものの余白によって、残ったものの意味を測っている。

① 事実

何かが残るとは、過去がそのまま未来へ移されることではないと述べている。

また、何かが消えるとは、それが完全に無になることでもないと述べている。

人は、残ったものを手がかりに消えたものを想像し、消えたものの余白によって残ったものの意味を考えている。

② ここから言えそうなこと

残るものと消えるものは、単純に反対の関係ではない。

残ったものは消えたものを想像する手がかりになり、消えたものは残ったものの意味を支える余白になる。

だから、過去はそのまま保存されるのではなく、残ったものと失われたものの関係の中で受け取り直されると言える。

③ 言いすぎになりそうなこと

- 残るものの意味は、実際には消えたものの余白によって決まる面のほうが大きい。

- 過去を受け取るうえで大切なのは、残された形そのものよりも、そこから想像される失われたもののほうである。

- 何かが消えることによって初めて、残ったものは本当の意味を持ち始める。

- 残されたものを過去そのものと見なすより、失われたものとの関係の中で読み直すほうが、過去に近づける。

- 消えたものを想像できないなら、残ったものただの物や記録にとどまってしまう。

④ つまりどういうことだと言えるか

残るとは、過去がそのまま保存されることではなく、消えるとは完全になくなることでもない。

私たちは、残ったものを手がかりに失われたものを思い浮かべ、失われたものとの関係の中で、残ったものの意味を受け取り直している。

おわりに

この冊子では、評論文、物語文、二資料比較、総合長文など、さまざまな文章を扱いました。題材も、「待つこと」「似ていると見ること」「古い物を片づけること」「上達」「街の保存と更新」「約束の記憶」「説明の分かりやすさ」「残るものと消えるもの」など、多岐にわたります。

けれども、この冊子で大切にしたいことは一つです。それは、本文をただ読んで答えを探すだけでなく、そこに何が書かれていて、そこからどこまで言えるのかを見きわめ、自分のことばで核心を立て直すことです。

文章を読むとき、私たちはつい、分かりやすい言葉に飛びついたり、知っている考え方に当てはめたりしてしまいます。しかし、よい読解には、もう少し静かな注意が必要です。本文に書かれている事実、そこから自然に言えそうなこと、けれどもそこまでは言いすぎになること。その境目を見つめながら、「つまり、こういうことだ」とことばにしていく力が求められます。

この冊子の「核心をことばにする」は、その力を育てるために置きました。これは、単なる言い換えの練習ではありません。本文の骨をつかみ、それを自分の理解としてもう一度組み立てる練習です。

選択問題も記述問題も、決して易しくはありません。すぐに答えが見えなかったり、どこまで書いてよいか迷ったりしたところもあったと思います。けれども、その迷いの中にこそ、読む力が育つ場所があります。

本文に寄り添いながら、本文に飲み込まれすぎず、自分のことばで考えながら、勝手な感想へ飛びすぎない。そのあいだを探ることが、現代文の大切な力です。ここまで取り組んだあなたは、かなり手ごたえのある文章と向き合ってきました。その時間は、受験や試験のためだけのものではありません。ものごとをどう見るか。他者の言葉をどう受け取るか。自分の考えをどう確かめ、どうことばにするか。そうした力にも、きつとつながっていくはずですよ。

お疲れさまでした！。

